三訂

帝國讀本

巻一

375.9
Ha7
資料室

41583
教科書文庫
4
810
41-1922
20000
5427

資料室
375.9
Ha7

大正十一年一月二十五日
文部省檢定濟

文學博士芳賀矢一編

三訂 帝國讀本

東京 合資會社冨山房發兌

廣島大學
教
54271
圖書

目次

三訂帝國讀本 卷一目次

一 喜……一
二 あけぼの……五
三 櫻……七
四 九十の春光……一一
五 東京……一四
六 都會と田舍の間……二〇
七 競漕……二四
八 兄弟……三二
九 巴里の五月……三五

一〇　飛行將校……三九
一一　日本海の海戰　其の一……四八
一二　日本海の海戰　其の二……五四
一三　猫の作戰計畫……六〇
一四　智慧伊豆……六八
一五　頓智五題……七五
一六　鍛錬……七八
一七　我が幼時……八三
一八　蜻蛉……八八
一九　白馬嶽に登る……九一
二〇　山の歡喜……九八
二一　日光だより……一〇〇

二二　學藝に志す者の訓……一〇七
二三　天の橋上……一〇九
二四　猿……一一二
二五　水泳日記……一二三
二六　漢土雜話……一二六
二七　春夏秋冬……一三〇
二八　月雪花……一三三
二九　鳥の美……一三九
三〇　秋分……一四五
三一　一燈錢……一四七
三二　座右の銘……一五〇
三三　明治天皇の御遺物を拜す　其の一……一五三

三四　明治天皇の御遺物を拜す其の二……一五八
三五　明治神宮に詣でて……一六八

自修文

一　人の運……一
二　犬ころ……三
三　東京から青森まで……七
四　北白川の月影……一〇
五　宮本武藏……一五
六　少年の美德……一九

卷一目次終

三訂 帝國讀本　卷一

幽谷を出でて喬木に遷る

一　喜

春は來れり。山の櫻は咲き、野の草は萠ゆ。遠山の雪は未だ消えざれども、小川のさゝやきは鳥の聲と共に長閑なり。新年を迎ふる喜にもまして喜ばしきは學年の始なり。まして今年は小學校を卒へて、中學校にうつれるをや。幽谷を出でて、喬木に遷るといふ鶯にも似たるかな。學友の多くは舊知の人なれども、新

しき友も半ばは交れり。新しき教科書を携へて校堂に上る嬉しさ。喜ばし、喜ばし。

學問の道は際限なしと聞く。新に中學生となりて、更に進みたる學問の道に入るは誠に幸福なり。昔は學ぶ志ありても、學ぶべき學校も無く、學ぶべき師も少かりきといふ。我を學ばしめ給ふ父母の恵も嬉しく、物學びする道のたやすき大御代の恵も嬉し。

大御代

つら〳〵

つら〳〵思へば、日本國の臣民と生れ出でて、此の大御代に遇へるは何よりの喜なり。世界の國々さまざまあれど、我が國史の如きうるはしき國史をもてるはなし。我が日本は建國の昔に君臣の分定まりて、

君臣の分

班に入る

萬世一系の大君代々相繼ぎて、仁慈の政もて民を惠み給ふ。君臣の間に父子の親みあり、一國は大なる一家を成せり。三千年の歴史を經て、國勢は愈〻盛に、今は世界一等國の班に入りぬ。日本臣民たる我等が心には、世界の人々の知り得ぬ誇あり、大なる喜あり。

趣興

我が國は氣候温和にして、四季をり〳〵のうつりかはりそれ〴〵に趣變りて珍しく、春は花、秋は紅葉の樂しき眺いつも盡きず。山は青く水は清くして、山には早蕨を摘み、菌をあさる樂みあり、川には釣を垂れ、網をうつ興も多し。神々しき富士の山、繪の如き瀬戸内海、中にも日本の三景として世に知られたる陸

神往き魂飛ぶ

前の松島、丹後の天橋立、安藝の嚴島、寫眞にて見るだに神往き魂飛ぶ心地す。日本は世界の一大公園なりと、外國の人々も稱讃したりとかや。

印す

三千年の歴史を印したる名所舊蹟は各地方に多し。畿内には神武天皇の都し給ひし橿原の宮址を始め、歴代の都の跡をも尋ぬべく、それの神社、これの寺院、其の由緒を聞けば、みな過ぎし世をしのぶ種ならぬはなし。奈良の舊都に大佛殿の莊嚴を仰ぎ、京都の三條大橋の上に紫宸殿の御屋根を望む時、其の感懷や如何ならん。他日必ずこれ等の名勝舊地を巡遊する時あるべしと思へば、早くも今より喜ばしさに堪

由緒

感懷

人生の春

へず。

我が身を思ひ、我が家を思ひ、我が國を思へば、すべて大なる喜あり。青年の心には常に此の喜の絶えぬなるべし。いでや此の喜の心を以て、日々の學業を勉め、父母の慈愛、師の高恩、大御代の恩澤に報いまつらん。時は今春なり。青年は人生の春なり。

二　あけぼの

島崎藤村

紅細くたなびけるあけぼのの
雲とならばや、あけぼのの
雲とならばや。

闇を出でては光ある
空とならばや、あけぼのの
　　空とならばや。

春の光を彩れる
水とならばや、あけぼのの
　　水とならばや。

鳩に履まれてやはらかき
草とならばや、あけぼのの
　　草とならばや。

—藤村詩集—

三　櫻

櫻の咲くのは春の末である。春の日本は水蒸氣が多い。どんよりと曇つて、寒くもなく、暑くもない日和を花曇といふ。夜は照りもせず曇りもせぬ朧月夜、雲霞とまがふ花には最もふさはしい景色である。そよそよと面を吹くや春風。春の特色はどこまでも駘蕩といふ點にあり、温和な所にあり、峻嚴猛烈といふ心の微塵も無い所にある。櫻は此の時候に孕まれて咲

(一)「照りもせず曇りもはてぬ春の夜の、朧月夜にしくものぞなき。」（新古今集、大江千里）

ふさはし
駘蕩
峻嚴
微塵

出づる花である。際立つた特色の無い所が、即ち其の特色である。(一)賀茂眞淵は

うらゝとのどけき春の心より
にほひ出でたる山ざくら花

といつた。春の日は永い。

(二)久方の光のどけき春の日に
しづ心なく花の散るらん

櫻は永陽の日に最もふさはしい花である。こゝに大宮人の悠揚迫らぬ樣子が想ひやられる。

(三)もゝしきの大宮人はいとまあれや
櫻かざして今日もくらしつ

(一)江戸の國學者。明和六年(一四二九)歿。年七十三。

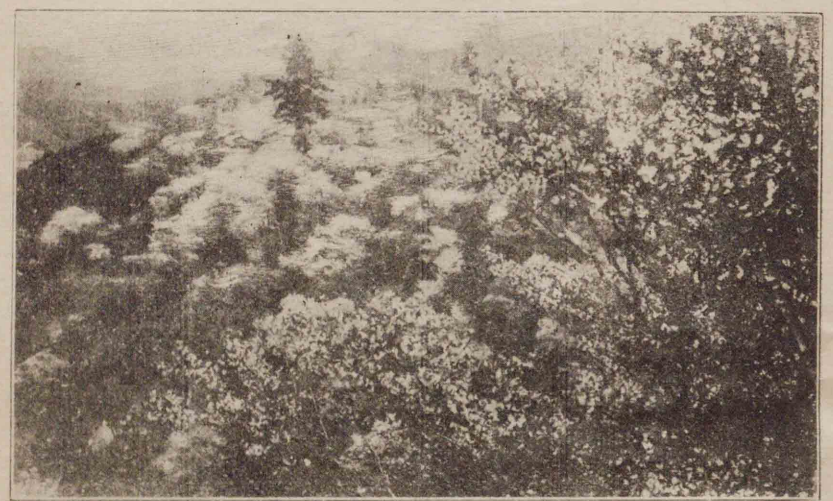
(二)平安朝の歌人紀友則の作。「櫻の花の散るをよめる」と題して、古今集春の部に載す。

悠揚迫らず

(三)奈良朝の歌人山部赤人の作。新古今集春の部に載す。

黄昏

(一)八田知紀の歌。



吉野山の櫻

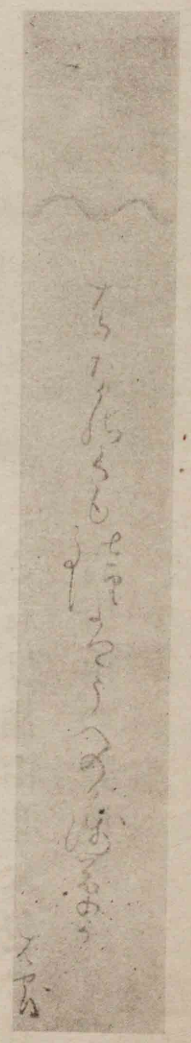
牛車の歩みおそく花見て歸る黄昏の景、さながらの繪卷物である。

(一)よし野山
かすみの奥は
知らねども
みゆる限りは
櫻なりけり

これは滿山花に包まれた吉野山の景色を詠んだのである。

花のくも鐘は上野か淺草か　芭蕉

(一)「鐘一つ賣れぬ日はもなし江戸の春。」（其角）



松尾芭蕉筆蹟

これは鐘(一)一つ賣れぬ日もなき大都會の、花に掩はれた光景である。櫻は牡丹や薔薇のやうに花瓣を賞翫する花では無くして、木として賞翫する花である。否多くの木を集めて、人は唯花中に在つて賞翫する花である。上から下に見て愛でる花では無くして、下から眺めて愛でる花である。春風四月、日本人はしばし花の世界の人となるのである。

波の花

二十四番の風

九十の春光

四　九十の春光

大町桂月

一

秋の風は泣くなり。冬の風は怒るなり。春の風は笑ふなり。

春の風の吹く所、そこに淡雪消えて若草萠え、谷川の氷とけて波の花まづ咲く。枯木活きて芽をふき、燒痕蘇りて蕨の優しき拳、空を摑まんとす。二十四番の風吹盡して、梅咲き、桃咲き、櫻咲き、九十の春光到る處駘蕩として春は海の如く、人は花に送られ花に迎へられて、心おのづから長閑なり。

春はいのちなり、萬物みな活きて動く。春は愛なり、

天地共に笑ふ。

二

梅や、桃や、梨や、李や、果實あるが故に墻籬の中に閉さるれども、櫻は幸に食はるべき果實を有せず、野に、山に、到る處春を飾る。これ櫻ならでは得べからず。又日本ならでは求むべからず。我が日本を櫻花國とは言ひ得て切なるかな。

櫻は多きをよしとす。一目千本、滿山みな櫻、朝日と相映發す。何等の美觀ぞや。されど人跡絶えたる山奥、清水ちよろ〳〵と流るゝあたり、其の梢とも見えざりし一本の櫻の花にあらはるゝも、亦興あらずや。

映發す

(一)「深山木のその梢とも見えざりし、櫻は花にあらはれにけり。」（詞花集、源頼政）

散るを惜しむは櫻を愛する所以、にはあらざるべし。一陣の春風に千片また萬片、惜しげもなく枝を辭して空に香雪を漲らし、地に錦繡を布く。櫻は散るさまこそ最も愛すべけれ。

香雪

三

菜花一路、胡蝶と人と相追ふ。春風の行方それと知られて、柳の絲靡くとも無く動く所、水車ゆるくめぐり、はねつるべ音無くして、小犬籬根に眠る。遙かなる桃林の上に塔の見ゆるは伽藍あるにや。詣でて歸るとおぼしき村娘の一むれ、相和して歌ふ聲漸く細く漸く遠く、つひに霞の中に消えゆく。

菜花一路

伽藍

一庭に薫ず

春日麗かにして、梅花一庭に薫ず。小猫縁に蹲り、少女二人追羽子を突く。風死して空に唸りし紙鳶みな地に落ち、一鳶ひとり高く舞ふ。

——文藻三百題——

光景

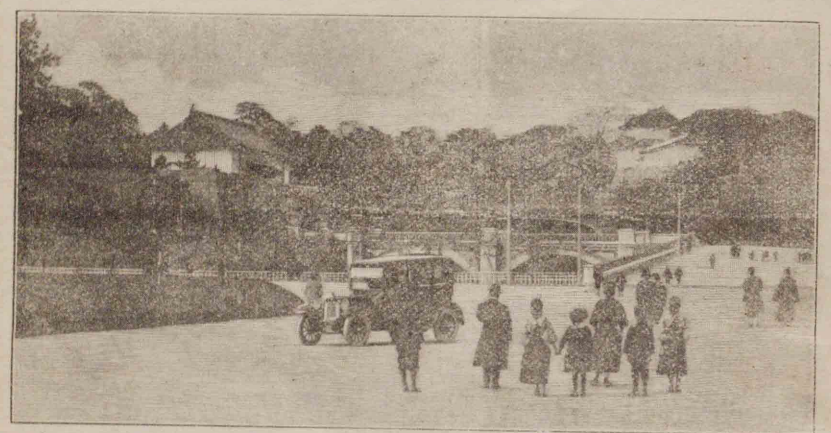
五　東　京

大日本帝國の首都東京市は面積五方里、町數一千四百六十九、人口二百十七萬を數ふ。人口よりいへば、世界大都の第五位に居る。

天皇陛下のいます宮城は市の中央に在り。二重橋外の廣場より、御堀を隔てゝ宮殿の御屋根を拜し奉る。莊嚴なる光景世界に比類なし。

廣表

使館



宮城の周圍は麹町區なり。二重橋前より南して、櫻田門を出づれば、司法省、海軍省、外務省、霞ヶ關離宮、貴衆両議院等の宏壯なる建物甚だ多し。海軍省、司法省と背中合に、日比谷公園あり、廣袤五萬四千餘坪。外務省の附近、霞ヶ關より永田町にかけては外國の使館相接し、諸大臣の官邸相續く。其の他陸軍省、參謀本部、大藏省、内務省、文部省、鐵道

官衙散在す

國家に殉ず

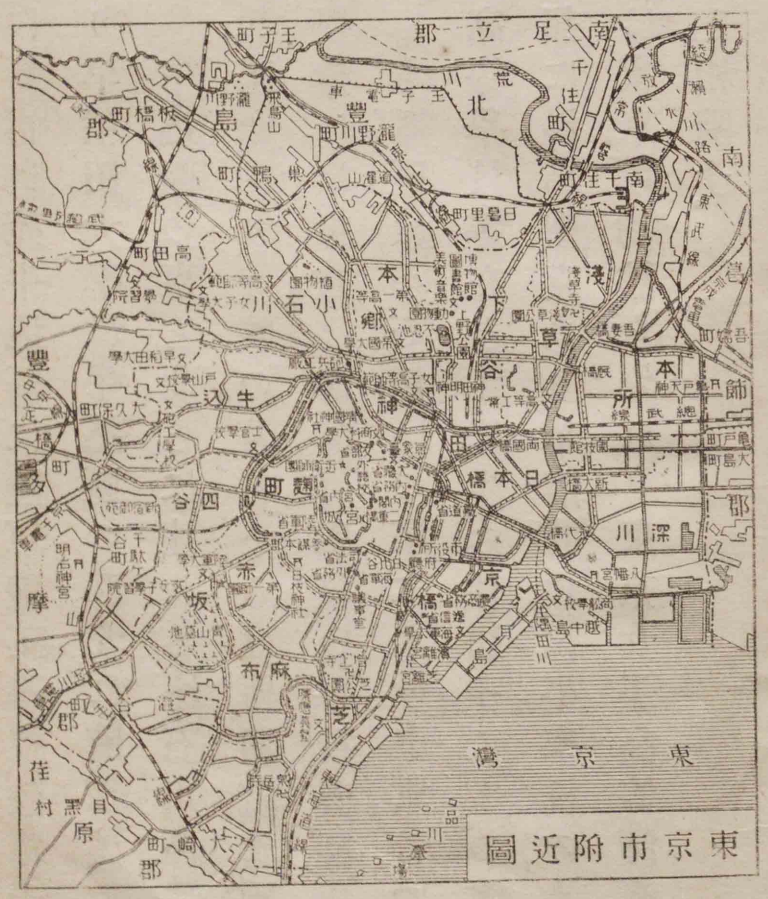
齋きまつる

(一)淨土宗の關東總本山。三緣山と號す。

省等の諸官衙皆區内に散在し、諸皇族方亦多く居を此の區内に占め給ふ。東京外國語學校、國學院大學亦此の區内に在り。九段坂の上には有名なる靖國神社あり、維新前後及び明治以後の戰役に、國家に殉じたる人々を祀れり。域内櫻樹多し。

麹町區の西南に赤坂區あり、青山離宮のある所なり。離宮の附近に故乃木大將邸あり。離宮の西に當り、代々木の原に明治神宮あり、明治天皇を齋きまつる。

芝區は北麹町區に接し、西麻布區に隣して細長く南に延び、東宮御所、芝離宮あり。また慶應義塾大學あり。芝公園内の增上寺(一)は、德川氏の廟所として知られ、



高輪の泉岳寺は、四十七士の墓所として名高し。

赤坂區の北に四谷區あり。四谷區の北に牛込區あり。四谷、赤坂兩區に跨りて赤坂離宮、四谷區

に新宿御苑、牛込區に陸軍砲工學校、陸軍士官學校あり。早稲田大學は牛込區の西北に隣接す。

牛込區の東と北とに連れる小石川區には、陸軍砲兵工廠あり。寺院の著名なるは傳通院(一)、護國寺(二)にして、學校には東京高等師範學校、盲學校、聾唖學校等あり。

本郷區は小石川區の東にあり。東京帝國大學、第一高等學校等在りて、學生の住居するもの多し。區の南部に湯島聖堂あり。幕府時代、昌平學校のありし所、今は東京博物館となれり。東京女子高等師範學校は之と相隣す。

下谷區は本郷區の東にあり。上野公園、不忍池を以

(一)淨土宗。德川家康の母水野氏傳通夫人の墓あり。
(二)眞言宗。天和元年德川氏の建立。

て名高し。上野公園は面積十九萬五千餘坪、長松老杉欝蒼として、櫻樹其の間に交れり。惜しむらくは近年老樹の枯死するもの多し。公園内に東京帝室博物館、動物園あり、四時の遊覽者絶えず。東京音樂學校、東京美術學校、帝國圖書館等亦公園内に在り。公園の高地より、西は不忍池を隔てゝ本郷區を望むべく、東は下谷區の東半部と淺草區とを見下して、淺草區に名高き觀音堂(一)をも指點すべく、又遙かに隅田川を望むべし。隅田川は市の東部を流れ、吾妻橋、厩橋、両國橋、新大橋、永代橋の五大橋を架す。東京高等工業學校は厩橋の近傍に在り、淺草區に屬す。川の東部なる本所、深川

欝蒼

(一)金龍山淺草寺の俗稱。天台宗。

指點す

中樞

(一)もと德川氏の別園にして、濱御殿といふ。維新後、隣地舊紀州邸を合せて離宮とせらる。

両區には各種の工場多し。

商業の最も盛なるは日本橋區、京橋區にして、共に宮城の東方に當れり。京橋區の中樞ともいふべきは所謂銀座通にして、濱(一)離宮、農商務省、遞信省、海軍大學校等亦何れも本區内に在り。舊居留地には外國人の今尚住居するもの少からず。

神田區も亦商業の盛なる所なり。區内に東京商科大學あり。神保町通には新古の書籍を商ふ店軒を並ぶ。

六　都會と田舍の間

國木田獨歩

(一)東京市の西郊澁谷町に在り。
(二)東京市の西南に突出せる一帶の高地。芝區に屬す。
(三)東京市の西端新宿より甲州へ通ずる街道。
(四)新宿より東京府下四多摩郡青梅町へ通ずる街道。
(五)東京市の北端本郷區より中山道へ通ずる街道。
(六)澁谷町の四方世田ヶ谷へ通ずる街道。

社會の縮圖

必ずしも道(一)玄坂といはず、又白(二)金といはず、東京市街の一端、或は甲(三)州街道となり、或は青(四)梅街道となり、或は中(五)山道となり、或は世(六)田ヶ谷街道となりて、郊外の林地田圃に突入する處の、市街ともつかず、宿驛ともつかぬ町外れの光景には、何となく人をして社會といふものの縮圖でも見るやうな思をなさしめるものがある。大都會の生活のなごりと、田舍の生活のなごりとが此處で落合つて、緩やかに渦を卷いて居るやうにも思はれる。

其處には片眼の犬が蹲つて居る。此の犬の名の通つて居る限りが、即ち此の町外れの領分である。大八

車が二臺三臺と續いて通る。其の空車の轍の響が喧しく起つては絶え、絶えてば起りつして居る。

鍛冶屋の前に二頭の駄馬が立つて居る。蹄鐵の眞赤になつたのが、鐵砧の上に置かれ、火花が夕闇を破つて、往來の中程まで飛ぶ。往來の角で話して居る人人が、どつと何事をか笑ふ。月が家並の後の高い樫の梢まで昇ると、向側の屋根が白んで來る。

かんてらから黑い油煙が立つて居る。其の間を村の者町の者が數十人駈廻つてわめいて居る。色々の野菜が彼方此方に積んで並べてある。これが小さな野菜市、小さな糶場である。

虛空

日が暮れると直ぐ寢てしまふ家があるかと思ふと、夜の二時頃まで店の障子に火影を映して居る家がある。理髮所の裏が百姓家で、牛らしい唸聲が往來までも聞える。酒家の隣家が納豆賣の老爺の住家で、毎朝早く「納豆々々。」と嗄聲で叫んで、都の方へ向つて出掛ける。夏の短夜が間もなく明けると、もう荷車が通り始める。ごろ〳〵がた〳〵絶間がない。蟬が往來から見える高い樹で鳴きだす。だん〳〵暑くなる。砂埃が馬の蹄、車の輪に煽られて、虛空に舞上る。蠅の群が往來を横ぎつて、家から家、馬から馬へ飛んで歩く。

それでも十二時のドンが微かに聞えて、何處か都

の空の彼方で汽笛の響がする。

—武藏野—

七　競　漕

久米正雄

晴れがましし

競漕の日は來た。空は朝から美しく晴れあがつた。學校の學務室から小使が朝早くやつて來て、合宿所の前に樺色の大きな旗を立てた。それがいかにも晴れがましく見えた。

午後になると晴れたまゝに風が吹いて來て、應援船の旗をはた〳〵と鳴らした。コース[1]には可なり荒い波が立つた。愈競漕が始らうといふ頃になつたら、珍しい夕凪が來た。

[1] Course.

選手は皆樺色のユニフォーム[1]を着た。土手では觀衆が一種の尊敬と好奇の念を持つて、此の樺色の衣服を着た選手達に道をあけた。

繫留す

味方の短艇がまづ拍手に送られて臺船を離れた。二十本ほど漕いで、審判艇の差出す綱に繫留した。續いて紫の敵艇も繫がれた。

錯綜す

艇庫と土手と應援船から「樺あ。」「紫い。」などといふ聲が錯綜して起つた。審判艇は二つの艇を曳いて、發足點へ向つた。

浮標

艇は發足點の赤い浮標に着いた。水路を見渡すと、風は全く凪いでゐるのではなかつた。それは絶えず

[1] Uniform. 好奇

瞬間

(一)Seat.

東北から吹いて來て、艇首を左へ曲げた。私は氣が氣でなかつた。其の中に「用意」の命が下つた。艇首は又一瞬間强風に曲げられた。「え、儘よ。もうなるやうになれ。」と眼を瞑つた。號砲が鳴り渡つた。用意と號砲の間がほんの一瞬間であつたのに、ひどく長いやうに思はれた。二つの艇の櫂は同時に水に入つた。

味方の艇はどうも滑り出しがよくなかつた。「こいつはいけない。皆慌てたな。」と思つた。敵艇を見ると、確かに一二(一)シートは此方より出てゐるらしい。「ゆつくり。」と整調が叫んだ。私は更に大きな聲で、もう一度其の言葉を全艇に傳へた。皆の調子がやつと合ひ出し

(一)Splash.

機を得る

た。此の時向ふの紫の舵手が、「敵艇を抜くこと約半艇身。」と叫んだ。私は忽ち其の後を受けて「嘘だぞ。」と怒鳴つた。今まで默つてゐた私は、一度其の言葉をいつてしまふと、急に口の緊りが解けたやうな氣がして、恐ろしく雄辯になつた。其の中に紫の三番が一つ大きなスプラッシュ(一)をして、水煙が鮮かにぱつと騰つた。機を得たと言はぬばかりに、私は「やつたぞ。あんな大きなスプラッシュを。」と叫んだ。それを見た者、見ぬ者も皆其の言葉に元氣づいた。敵の艇は沈默してしまつて、間もなく二つの艇は並んだ。そして水門前で、味方は約半艇身先んじてゐた。紫の舵手はそれでも「向

應酬す

機先を制す

遲馳せ

ふはもうへたばつたぞ。」などといつた。私も「なあに、此方が出てゐるぞ。」と應酬した。

水門まで來かゝると、私は「さあ水門だ。」と敵に先んじて叫んだ。いかなる舵手でもいふにきまつてゐる場所の指示を、敵艇の機先を制していふのも、一つの戰術であつた。早くいつた方が、晩くいつた艇より先に其の場所に屆いた譯だからである。遲馳せに敵は水門で特別な力漕を十本した。それで亦艇は並んでしまつた。後から追附かれると、何だかずつと追拔れたやうな氣がするものである。味方の艇は何だかいつもより船脚が遲いやうであつた。でも暫くすると、

(一)競漕の場所は東京の隅田川にて、渡場とは竹屋渡のこと。

半眼

(二)Pitch.

(三)Last heavy.

激勵す

味方の艇が又じり〳〵抜き出した。私は「此の調子で。」と叫んだ。敵は沈默してゐた。そしてもう渡場(一)での力漕十本は効力がなかつた。整調は半眼で其の力漕を見やりながら、やつと安心してピッチ(二)を上げ出した。

洗場では半艇身以上先んじてゐた。併し此處での半艇身ばかりの差では、敵のラスト・ヘビー(三)が利けば何の役にも立たない。私は「あと一分だ。もう死んでもいいぞ。」と激勵した。此の「あと一分。」といふ練習中に用ひ馴れた言葉が、何よりも選手を元氣づけた。一分間なら、いくらへたばつても漕げる筈なのである。

皆は疲れて來た。すると不思議に艇がよく出だし

協力

(一)Winning.

た。味方の艇は、疲れて來ると、各個人の癖がとれて、全體としての調子が揃ふのである。協力は此の時始めて平均した。そして整調の櫂につれて、各は器械的に身體を前後に動かした。

敵のラストも實によく出た。併しこれを見て氣遣つてゐる間に、味方の方のヘビーも非常によく利いた。多年の老練で整調のピッチがぐん〳〵上つた。「もう十本」決勝點に入るまでは、隨分長く感ぜられた。私はひよつとして、もうウィンニング(一)へ入つても、審判の號砲が發火しないのぢやないかと思つた。其の瞬間に號砲は響いた。皆は漕ぎやめて、艇内に身を伏せ

喝采

接戰

た。私は始めて此の時嵐のやうな喝采が水上に鳴響いてゐるのを聞いた。これは決勝點に近づく時から盛に鳴つて居つたのであるが、私の耳には入らなかつたのである。

「どつちが勝つたんだ」と二番が苦しい息の中から情ない聲を出した。

「安心し給へ。僕等だ」と私は答へた。併し私自身も勝利を確信してゐるのではなかつた。そして審判所に掲げられた樺色の旗を見るまでは、安心がならなかつた。

喝采はまだ續いてゐた。今までに類のない程の接

戰であつたのが、敵味方のいづれにも屬してゐない觀衆をさへ、熱叫せしめたのである。

―學生時代―

熱叫

八　兄　弟

柳澤淇園

子を見ること親に若かず

子を見ること親に若かずといへり。奥州の秀衡(一)は男子五人あり。兄の錦戸太郎は常に良き馬を好みて、山野を乘ることをつとめ、元良(二)の冠者は女子を友として遊ぶことを專らに好み、伊達(三)の次郎は山川の漁獵を好みて、他の事をせず。泉(四)の三郎は武具を好みて、よき物ある時は求め來りて自ら試み、刀劒なども作(五)ものは人にも讓り與へて、良しからざるは摧き折りては棄てたりとぞ。何れも文學の道を習はするに皆嫌ひて、たゞ他の業のみを事としけれど、泉ばかりは夜を日に繼ぎて、文學の道に凝り勗めたり。

(一)藤原秀衡。
(二)國衡。
(三)高衡。
(四)泰衡。
(五)忠衡。

夜を日に繼ぐ

或時秀衡は子供の志を試し見んとて、秋の末つ方金華山へ皆々を伴なひ、山上に席を設けて、山河の風景を眺望する折から、子供を集めて申しけるは、「何れも、遙かなるあなたの山の尾の上に一木の櫻あり、今を盛と見えて、花の爛漫として咲けること、雪かあらぬか。皆々の目にも、さぞかし見ゆらんや。」と申しけるに、おの〳〵伸上り立上りつゝ見て、「いかにも父の仰の如く、櫻花今を盛と見えて、しかもうるはしく見え

尾の上
あらぬか

てだて

候なり。」といふに、泉ばかりは暫く眺めつれども、櫻花の見えざりければ、父の側に到りて、「仰に隨ひ見參らせ候へども、我が眼には花らしきもの少しも見え申さず。」とて、打連れて歸りぬ。

秀衡心に思ふには、花無きを有りといひしは、彼等が志を見んとてのてだてなるに、四人は皆實無き花を、我に詔ひて有りといへども、泉ばかりは無き故にこそ無しとはいひけれ。勇は錦戸すぐれたれども詔ふ心あり。元良は柔弱なり。伊達は義あるに似て勇無く、泉は勇少しといへども義ありといへり。

其の後九郎義經奥州に來りて、秀衡をたよりて居

討手下向
先途

(一)Paris. 佛蘭西の首府。世界第三の大都會。

面白をかしく

ける頃、鎌倉より討手下向の時、秀衡泉ばかりに遺言して、深く義經の先途をたのみ置きけり。果して錦戸はじめ兄弟達皆義經に反きけるに、泉はひとり義に死して、芳しき名を後世に留めたりとぞ語り傳へたる。

—雲萍雜志—

九　巴里の五月

島崎藤村

山羊の乳を賣りに來る男が、朝早く此の町を通ります。幾頭かの山羊を引連れながら、面白をかしく笛を吹いて來るので、呼留めて買はうとする者があれば、すぐ其の家の前で、新鮮な乳を搾つてくれるので

(一)信濃國。

心を誘はれる

す。今朝も私は山羊の乳賣の笛に眼を覺しました。夢のやうに寢床の中で耳を澄ますと、若草を吹く五月の風が、遠い牧場の方から、とぎれ〳〵に持つてでも來るやうな笛の音が、まだ朝のうちの玻璃窓へ傳はつて來て、何かかう自分等の心の底に眠つて居るものを、誘ひ出すやうな心地が致します。故郷で飴屋の吹いて來る唐人笛を聞きますと、二度とは自分等の生涯に來ない少年時代の方へ心を誘はれるやうな氣が致しますが、此の山羊の乳賣の笛の調子が、何となくあの唐人笛に似て居ります。今少し澄んだ柔な音です。巴里のやうな大きな都會の空氣中にも、かう

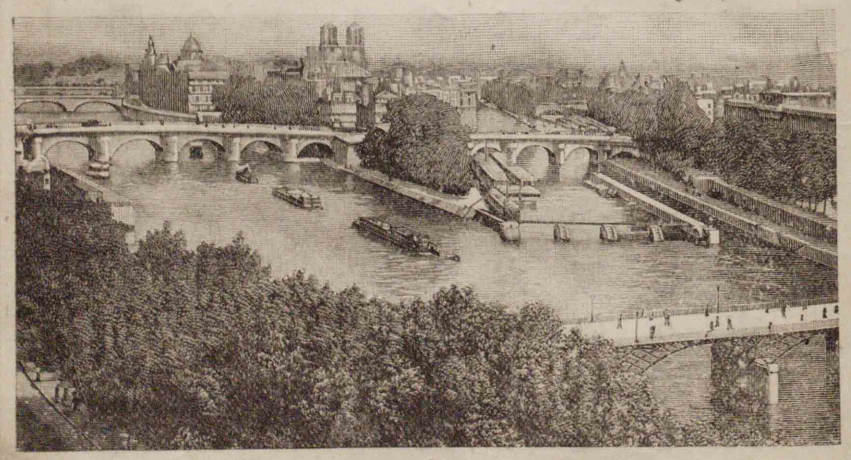
しらべ

あわたゞしく散る

でも

した田舍めいた情を傳へる細い幽かなしらべが流れて居るかと、珍しく思ひました。

只今は當地でも最も樂しい時です。輝いた日光は窓の外にあります。櫻の花があわたゞしく散つて、若葉に變つて行くやうな趣は、當地には見られませんが、でも春の過ぎて行くといふ心地が、私の胸に深く浮んでまゐります。



巴里セーヌ河

(一)Platane.（佛蘭西語）

暮春

日に〳〵茂つて行くプラターヌ(一)の並木の若葉が、少し萎れて見える時、其の葉の間に日光の滿ちた時、五月らしい雨が來て柔な新綠の生返る時、私は又遠い空の彼方に、曾て信濃の山の上で望んだと同じやうな、白い綿のやうな暮春の雲を見つけます。それが微風に吹かれて、絶えず形を變へるのを望みます。長い黃昏時が又やつて來るやうになりました。恐らく此の黃昏時は暮れさうで暮れない町の空氣の紫色と共に、もつと〳〵長く續くやうになるでせう。そして極短かつた冬の日とちやうど反對に、一晝夜の大部分を晝のやうに明るくしてしまふでせう。

象徵

今次
(一)England.
(二)Deutchland.

地帶から言つて、當地が北海道あたりに近い事は、鈴蘭の花で思ひ當ります。此の花が信濃の山の上でも採集されるのは、やはり北海道あたりと氣候を同じくするからでせう。五月の一日には、當地の町々で鈴蘭の小さな花束にしたのを賣ります。それを幸福の象徵として、胸のあたりに挿して行く男女を見掛けます。

—平和の巴里—

一〇　飛行將校

姉崎正治

今次の世界大戰に於て、英吉利(一)の一飛行將校が、敵たる獨逸(二)の飛行機を射落した時の事である。彼は敵

塹壕

飛翔す

物の哀れ

(Pocket.

一葉

齎す

機の地に落ちるのを見ると共に、其に乗組んで居る敵兵の事を思ひ、敵の塹壕前ながら、敵機の跡を追うて着陸した。敵機は翼を折つて破れ、乗組士官の體は地に横たはつて、呼吸は既に絶えて居た。敵ながら今まで空中に飛翔して居た人の事を思ひ、物の哀れを覺えて、其の屍體を片附けてやらうと、胸のポケット(一)の邊にさはると、其所に堅い物があつた。之を捜り出して見ると一葉の寫眞で、それには「汝の母」と書いてある。即ち今戰死した士官は、空中戰にも常にポケットに母の寫眞を藏して居たのを見て、其の士官は一層の哀れに堪へず、まづ敵の屍體を味方の塹壕に齎

武運強く

母御

し、再び自分の機に乗じて尙一戰した。其の日の戰にも武運強く、安全に味方の戰線の後に歸つた。

其の後英吉利士官は、此の射殺した敵と其の老母の事を思ひ、それにつけて自分の身の上、且は早くに亡くなつた自分の母の事を考へ、感慨に堪へず、敵士官の姓名を辿つて、彼が母へ一書を送つた。其の書面は左の如くである。

「自分は英吉利の飛行士官です。何月何日、私は敵たる獨逸の一飛行機を射落しましたが、其の敵士官は死ぬまで母御の寫眞を大切にポケットに藏して居たのを發見し、其の母御たるあなたに此の

殘忍

偵察

敬意を表す

手紙を差出します。

即ち私はあなたの御子息を殺しました。併し其の人を憎んだのでもなければ、又其の人の母御たるあなたのお悲を知らないのでもない事は勿論です。唯戰爭といふ殘忍な仕事に於て、此は私の義務であつたのです。敵士官即ちあなたの御子息が、味方の陣地を空中から偵察して無事に歸られたなら、其の結果味方は必ずやそれだけの攻擊を受けて、味方の兵何人かの生命は、其の爲に亡くなつたでせう。此の不幸を防ぐ爲に、私は敵機を射落しましたが、其の乘組士官の身體に敬意を表し、其を

無量の感

片附けようとする時に、其の人の母御たるあなたの寫眞を發見して、無量の感に打たれたのです。

私は子供の時に母を喪ひ、今でも人に母親があるのを見て、羨しく思ふのですが、其の私の殺した敵士官には、あなたといふいとしの母親が居られ、死ぬまで母御の寫眞を抱いて居られたのを見ては、自分にはじつとしては居られない感がします。彼の人を殺した私が、あなたに手紙を上げるのは、殘忍だとも思はれませうが、私としては、彼の人の母御に對して、恰も自分の母に對するやうな親しい感じを、悲の中にも禁じ得ません。

私が彼の人を殺したのは、戰爭といふ殘忍な惡魔のした事です。あなたも、又亡くなつたあなたの御子息も、此の事を思うて、私の殺人を赦して下さるでせう。而して又彼の人の亡くなつた代りに、私は一人の母を得たやうな思のあるのを察して下さるでせう。今私の書く此の手紙は、彼の人と私と二人の魂が、一緒になつて書くのだと思つて下さい。もう此以上には書けません。涙で目は曇り、筆を執る手も震へて書けません。

此の手紙は英吉利軍の本營から、中立國の手を經て、獨逸國内の宛名の人に屆いた。一人の兒を喪つた

思ひやるだに

述懷

蘇生

母が之を讀んだ時の感は、思ひやるだに涙の種である。而して此の婦人は、數日後に長々と手紙を書いて、彼の英吉利士官へ送つた。大意は下の如くであつた。

「御手紙の着く前に、悴の戰死は知つて居りましたが、其の戰死の相手たるあなたの情深い御手紙を見た時の私の思は御察し下さい。通常ならば、あなたを悴の仇敵といふ所ですが、御述懷に接しては、其の仇敵が反つて悴の蘇生となつて、此の母に手紙を寄せてくれたやうに思へます。あなたが悴の懷にあつた私の寫眞に對して、亡き母御に對する心持がするといはれるやうに、あなたの御手紙

畢竟

は、私にとつては、戰死した忰の手紙としか思はれません。あなたは忰を殺したといはれ、又事實其の通りに違ない事は勿論知つて居ますが、殺すも殺されるも、共に各の國の爲で、人として何等の怨も仇もある譯のない事は、相互に明白の事でせう。其の怨もない者が互に殺さうとするのは、畢竟は戰爭の爲ですが、此に就いては、私は何も申しません。唯仇といふべきあなたが私を母の如く思ひ、私も亦あなたが死んだ忰の身代りのやうに思へるのは、何たる不思議の事でせう。

私には三人の男子があり、戰死したのは其の末子ですが、兄二人もやはり戰線に出て居て、何時弟と同じ運命になるとも計られませぬ。併し私は末子の戰死した爲に、あなたといふ新な子を得ました。戰爭が濟み平和の時が來、而して兄二人も無事に歸る事があれば、私はあなたに此の家へ一度來て戴きたいと思ひます。二人の兄もあなたを弟と思つて迎へるでせう。其の時には、あなたは、死んだ忰とあなたと二人分の子として弟として、私の家庭にいつまでも滯在して戴きたい。其の日の早く來らんことを神に祈ります。

而して最後には「汝の母」と、彼の寫眞に書いてある

通りに書いてあつた。

此の事實だけで十分である。一々註釋を要しない。人情の美は、眞心によりて此の如く結び附くものである。

—光あれ—

宙を飛ぶ

(一)露西亞のバルチック艦隊。

(二)明治三十八年五月二十七日。

一一　日本海の海戰　其の一

副直將校宙を飛んで駈來り、「『敵(一)の艦隊見ゆ』との無線電信がありました」と告げたるは、正に午前五時十五分。此の時早くも出港用意の信號、旗艦の檣頭に掲げらる。何人も待ちに待ちたる敵艦との出會なり。平生には思ひも寄らざる熱心にして迅速なる動作を

分擔の事業に當る

瞬くうち

天に冲す

意氣既に露國艦隊を呑む

時々刻々

千載一遇

怒濤舷側を嚙む

展望

以て分擔の事業に當り、用意は瞬くうちに整ひたり。

見渡せば各艦の黑煙天に冲し、さなきだに威風凛凛たる我が艦隊は、一層の偉觀を呈して、意氣既に露國艦隊を呑む。已にして旗艦三笠を先登とし、敷島、富士、朝日、春日、日進の順序を以て我が陣形を整へ、荒浪を蹴つて對馬海峽の東水道に向ふ。かくて進み行く程に、和泉よりの無線電信は、時々刻々敵の陣形と針路とを報告し來りしかば、千載一遇の時は來れりと諸士勇みに勇み、豪氣日頃に百倍せり。

折節南西の風烈しく、怒濤舷側を嚙んで、艦の動搖甚だしく、濛氣四方を鎖して、五海里以上を展望する

(一)對馬と馬關海峽との間に在り、周回一里。
(二)Rozhdestvensky. バルチック艦隊司令長官。海軍中將。

興廢在

能はず。やがて對馬の北方を過ぎしが、尙風波の靜まる樣子なければ、水雷艇隊に艦隊を離るべき命あり、同隊は避難所に向ひて航し去りぬ。

午後一時三十六分、敵の艦隊を冲(一)の島の西方に見る。ロゼストウェンスキー(二)長官の坐乘せる旗艦スワロフを先登として、アレキサンダー三世、ボロヂノ以下九隻之に續き、餘は濛氣の爲に見るを得ざれど、堂々戰列を整へ、鼠色の船體に淡黃色の煙突は、一層其の形狀を鮮明ならし

舳艫相銜む
匹敵す
(一)Inch.
國家の安危を此の一戰に賭す
龍虎相搏つ活劇
扼す

此一戰

東郷大將

む。舳艫相銜み、黑煙を靡かせて我に向つて進み來る狀、何ぞそれ勇壯なるや。

艦數に於ては相匹敵し、戰艦及び十二吋(一)主砲の數に於ては彼優り、裝甲巡洋艦及び八吋砲の數に於ては我優れる日露兩艦隊は、國家の安危を此の一戰に賭して、龍虎相搏つ一大活劇を茲に演ぜんとす。

一時四十分、旗艦三笠は敵の前路を扼せんが爲、針路を變じて敵艦隊に向ひしが、此の時檣頭高く、「皇國の興廢此

滿を持して發せず

砲火を注ぐ

序幕は開かる

の一戰に在り。各員一層奮勵努力せよ。」との信號飜りたり。全艦隊の士氣爲に大いに振ふ。

二時七分、敵まづ砲火を開き、盛に砲彈を放てども、距離遠くして、多くは海中に沒す。我は滿を持して未だ發せず、烈しき敵の砲火に堪へて、前進を續くること約六分、茲に於て旗艦三笠始めて砲火を開く。これより我が艦隊は適當なる位置を占むる毎に砲火を注ぎ、かくて幾日月待ちに待ちたる海戰の序幕は開かれたり。

両軍の砲煙は、煤煙と相混じて海上を罩め、水中に落つる砲彈の水柱は空を衝き、西も東も轟々耳も聾

初陣

勝敗の機既に決す

鋭鋒

せんばかりなり。敵は初陣の悲しさ、氣や顚倒したりけん、訓練や足らざりけん、其の砲彈多くは命中せず。これに反して、我が各艦より打出す砲彈は能く敵艦に命中し、其の爆裂の爲に、黑色の煤煙を揚ぐること數知れず。かくて二時四十分、彼我主力の第一戰に於て、勝敗の機は既に決せり。

三時十七分、我が第一戰隊は、全砲火を再び敵の主力艦隊の先頭に注ぎしに、敵は針路を轉じて我が鋭鋒を避け、我は之を追うて更に砲火を注ぎ、其の命中の狀、壯快を極む。

これよりさき、敵艦オスラビヤの既に海戰の初期

戰列を離る

に於て火災を起し、聊か前部を海中に沒しつゝ戰列を離るゝを見たり。さて此の第二回の激戰に於て、敵艦隊は全く擊破せられ、三時二十三分、旗艦スワロフも亦大火災を起し、戰列を離れて孤立するに至れり。

一二　日本海の海戰　其の二

第二回の攻擊終りたる後、敵の主隊はいづれに行きしか、見渡す限り海上は砲煙と煤煙とに包まれ、僅かに旗艦の孤影を殘せるのみ。此の時予は艦內を巡視せしに、兵員口を揃へて、「副長、御めでたう御座ります。」と述ぶ。誠に然り、天下豈かくの如き大慶事あらん

孤影を殘す

(一)本文の筆者東郷吉太郎。乘艦は朝日。

祝辭の交換

壯絕又凄絕

や。祝辭の交換は單にこゝのみに止らず、上中甲板到る處皆然らざるは無し。宛然これ歲旦の光景なり。

四時三十分、我が主戰隊はスワロフに砲火を集注しつゝ通過す。敵は既に半ば戰鬪力を失へる上に、今又砲火を浴びせ掛けられしことなれば、全艦忽ち黑煙に包まれ、焰煙熾に起り、やがて汽罐の破裂したるにや、黑煙蒸氣を交へて昇騰す。其の狀、壯絕又凄絕。

五時八分、我が驅逐艦のスワロフ攻擊のため突進するを認む。此の不幸なる戰艦は全部黑煙に包まれたれども、尙砲彈の發射を止めず、或は驅逐艦を防禦し、或は艦隊を砲擊して、飽くまでも抵抗す。其の意氣

敵ながら歎稱するに堪へたり

的中す

操舵

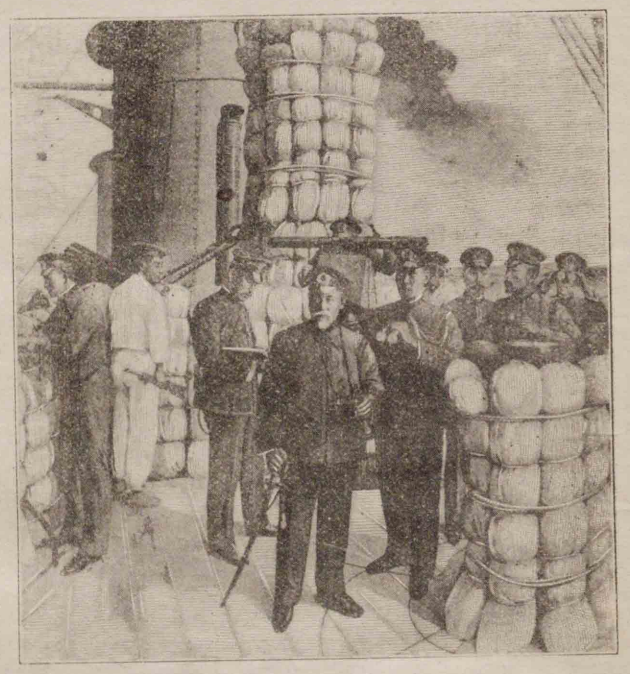
天晴なる働きぶり

や愛すべく、敵ながら歎稱するに堪へたり。

予が艦の砲擊を中止せる時、今は敵艦に唯一つ殘れる十二吋砲の一彈我が前檣に的中し、破片司令塔に飛入り、數人の死傷者を出したり。司令塔内に在りて操舵に從事し居たる一等信號兵曹は、此の彈片に右肩を貫かれしが、毫も屈する色無く、傍なる水雷長に向ひて、「我が右肩を見て給はれ。」といふ。水雷長顧てこれを探りしに、指を沒する程の裂傷にして、顏色既に蒼白となれるに、尙左手に舵柄を操つて、艦の運動を過たしめず、交代者の來るを待ちて、始めて繃帶所に赴きしは、さても天晴なる働きぶりかな。

彷徨す

焰煙天を覆ふ



三笠艦上の東郷大將

かくて我が戰隊はスワロフに大打擊を加へて過ぎ、轉回して再び之に向ひぬ。途中二檣三煙突なる假裝巡洋艦ウラルの彷徨せるを認め、第一戰隊より全線の砲火を集注したれば、彼は忽ち大火災を起し、焰煙天を覆ふが中に、まづ一煙突倒れ、次に一檣失せ、引續きて第二檣より第二、第三煙突まで悉く壞れ

去つて、後部より海中に沒し、忽ちにして復艦影を認めざるに至りぬ。其の間僅かに五分。沈沒したるは五時五十分なりき。

これより北方に向ひて敵の主隊を捜索せしに、偶スワロフの北西方に當つて四隻の敵艦を認む。二隻は稍近く、他の二隻は距離甚だ遠し。我が戰隊はまづ近き二隻に向つて進み、相並びて砲火を交へ、逃ぐるを追うて戰ふこと大約一時間。七時十八分、敵の嚮導艦ボロヂノは後部に大火災を起して、火光天を燒く。

時に我が旗艦三笠は針路を北方に轉じ、他の諸艦も之に從ふ。其の時富士は焰に包まれたるボロヂノに一彈を送りしに、爆裂して黑煙漲り昇る。誠に見事なる命中なり。續いて予が艦より砲火を注ぎしに、聊か前方に落ちたれば、予は距離を注意する中に、ボロヂノ爆發したりと告ぐるものあり。見れば唯黑煙を殘すのみにて、遂に其の沈沒の狀を目擊すること能はず。以て如何に迅速に其の海底に急ぎしかを知るに足るべし。これ恐らくは火藥庫の爆發に因りたるならん。時に七時二十三分。

目擊す

七時二十五分、戰鬪中止の命ありて、我が戰隊は北上す。時に日漸く西に傾き、驅逐艦、水雷艇は敵艦の周圍に集り、各攻擊の位置を擇び、今や遲しと期を待て

今や遲しと

るものの如し。

嗚呼、二十七日に於ける吾等の戰は終りぬ。夕陽既に天外に落ちて、視界漸く暗し。遙かに南方を顧れば、探照燈の光は波上に交錯し、砲聲殷々として、遠雷を聞くが如し。これぞ我が驅逐艦、水雷艇の敵艦攻擊に着手せしものと覺しく、八時頃より十時頃まで止まざりしが、遠ざかるに隨ひ唯波の音のみ高し。

—東郷吉太郎、掃露餘風による—

視界交錯す殷々

一三　猫の作戰計畫

夏目漱石

吾輩はとうく鼠を捕る事に極めた。

元氣旺盛

元氣旺盛な吾輩の事であるから、鼠の一匹や二匹は、捕らうといふ意志さへあれば、寢て居てもわけなく捕れる。今まで捕らなかつたのは、捕りたくないからの事だ。

花吹雪

春の日はきのふの如く暮れて、折々の風に誘はれる花吹雪が、臺所の腰障子の破から飛込んで、手桶の中に浮ぶ影が、薄暗い勝手用のランプ(一)の光に白く見える。今夜こそ大手柄をしてうち中驚かしてやらうと決心した吾輩は、豫め戰場を見廻つて、地形を飲込んで置く必要がある。戰鬪線は勿論餘り廣からう筈が無い。疊數にしたら、四疊敷もあらうか。其の一疊を

(一) Lamp.

御用を聞く

仕切つて、半分は流し、半分は酒屋や八百屋の御用を聞く土間である。竈（へつつひ）は貧乏勝手に似合はぬ立派なもので、赤の銅壺がぴかぴかしてゐる。其の後の羽目板との間二尺が、吾輩の鮑貝の所在地である。茶の間に近い六尺は、膳、椀、皿、小鉢を入れる戸棚となつて、狹い臺所をいとど狹く仕切つて、横に差出たむき出しの棚と、すれ〳〵の高さになつて居る。其の棚の下に、擂鉢が仰向に置かれて、擂鉢の中には、小桶の尻が吾輩の方を向いて居る。大根卸、擂粉木が並べて懸けてある傍に、火消壺が置いてある。眞黑になつた椽の交叉した眞中から、一本の自在を下して、先には平たい大

いとど
すれ〳〵の高さ
交叉す

大樣に動く

きな籠をかけてある。其の籠が時々風に搖れて、大樣に動いて居る。

便宜
てんで

是から作戰計畫だ。どこで鼠と戰爭するかといへば、無論鼠の出る所でなければならぬ。如何に此方に便宜な地形だからといつて、一人で待構へて居ては、てんで戰爭にならぬ。こゝに於てか、鼠の出口を研究する必要が生ずる。どの方面から來るかな。」と、臺所の眞中に立つて四方を見廻す。何だか東鄕大將になつたやうな心地がする。下女はさつき湯に行つて、歸つて來ぬ。子供は疾くに寢た。主人は相變らず書齋に引籠つてゐる。細君は何をして居るか知らない。時々門

書齋

悲壯

周密

前を人力が通る。通り過ぎた後は一段と淋しい。我が決心といひ、我が意氣といひ、臺所の光景といひ、四邊の寂寞といひ、全體の感じが悉く悲壯である。どうしても猫中の東郷大將としか思はれない。かういふ境涯に入ると、物凄い中に一種の愉快を覺えるのは、誰しも同じ事であるが、吾輩は此の愉快の底に、一大心配が横たはつて居るのを發見した。鼠と戰爭をするのは覺悟の前だから、何匹來てもこはくはないが、出て來る方面が明瞭でないのは不都合である。周密に觀察して見ると、鼠賊の侵入するには三つの路がある。彼等が若しどぶ鼠であるならば、土管に沿うて、流

吶喊す

遣過す

しから竈の裏手へ廻るに相違ない。其の時は火消壺の蔭に隠れて歸路を絶つてやる。或は溝へ湯を抜く漆食の穴から風呂塲へ廻つて、勝手へ不意に飛出すかも知れない。さうしたら、釜の蓋の上に陣取つて、眼の下に來た時、上から飛下りて一攫にする。それから、又あたりを見廻すと、戸棚の戸の右の下隅が半月形に食破られて、彼等の出入に便なるかの疑がある。鼻をつけて嗅いで見ると、鼠臭い。若しこゝから吶喊して出たら、柱を楯に遣過して置いて、横間からあつと爪をかける。もし天井から來たらと、上を仰ぐと、眞黑な煤がランプの光で輝いて、地獄を裏返しに吊し

警戒を解く

懸念

自信

法のつかない

た如く、ちよつと吾輩の手際では、上る事も下る事も出來ぬ。まさかあんな高い處から落ちて來る事も無からうからと、此の方面だけは警戒を解く事にする。夫にしても三方から攻撃される懸念がある。一口なら片眼でも退治して見せる。二口ならどうにかかうにか遣つてのける自信がある。併し三口となると、吾輩も手のつけやうが無い。どうしたらよからう。どうしたらよからうと考へて、好い智慧が出ない時は、そんな事は起る氣遣は無いと極めるのが、一番安心を得る近道である。又法のつかないものは、起らないと考へたくなるものである。吾輩の場合でも、三面攻撃

論據

得策

煩悶

成算

は必ず起らぬと斷言すべき相當の論據はないのであるが、起らぬとする方が、安心を得るに便利である。安心は萬物に必要である。吾輩も安心を欲する。よつて三面攻撃は起らぬと極める。

それでもまだ心配が取れぬから、どういふものかと段々考へて見ると、漸く分つた。三箇の計略のうち、いづれを選んだが最も得策であるかの問題に對して、自ら明瞭なる答を得るに苦しむからの煩悶である。戸棚から出る時には、吾輩之に應ずる策がある。風呂場から現れる時は、之に對する計がある。又流しから這上る時は、之を迎へる成算もあるが、其の中どれ

當惑

か一つに極めねばならぬ事になると、大いに當惑する。東郷大將はバルチック(一)艦隊が、對馬海峽を通るか、津輕海峽へ出るか、或は遠く宗谷海峽を廻るかに就いて、大いに心配されたさうだが、今吾輩自身の境遇から想像して見て、御困却の段、實に御察し申す。

(一)Baltic.

智謀を運らす

夜は淺い

吾輩はかく夢中になつて、智謀を運らして居る。夜はまだ淺い。鼠はなかく出さうにない。吾輩は大戰の前に一休養を要する。

—吾輩は猫である—

休養

一四　智慧伊豆

大町桂月

智慧伊豆とは松平伊豆守信綱(二)のことなり。其の伊

(二)川越の城主。寛文二年(一六六二)歿。年六十七。

獨占す

豆守が智慧の名稱を獨占せるは、如何なる功業によるかと討ぬるに、格別の功業は無し。伊豆守は老中となりたり。されど老中となりたればとて、特に智慧の名稱を得らるべくもあらず。伊豆守は島原(一)の亂を平げたり。されど島原の亂を平げたればとて、特に智慧の名稱を得らるべくもあらず。されば智慧伊豆の名は何によりて得たるか。

老中

(一)天草一揆ともいふ。寛永十四年肥前島原に起りし天主教徒の亂。

或時將軍(二)鷹狩して雲雀を多く獲たり。休息の際、將軍之を味はれんとす。急の事とて、老中ども雲雀を金串に刺して燒くに、火强く、手先熱して堪へられず、急げば急ぐ程早く燒けず、大いに困り居たり。伊豆守

(二)三代將軍德川家光。(一六二四—一六五一)

舌を捲く

假初

頓智

後れて來り、傍に木片あるを見出し、それに金串を刺して燒くに、火熱手に及ばず、易々と燒くを得たり。而も最も後に燒き始めし伊豆守が、最も早く燒き終へたり。他の老中ども舌を捲き、「平日の勤はとても伊豆守に及ばず。かやうなる假初の事だにも仕負けたり」。とて笑ひたりとぞ。是一場の頓智なり。されど之を以て智慧伊豆の智慧を證明すべきには非ざるなり。

或時將軍御堀にて小鷹狩ありしが、(一)和田倉橋邊にて、堀の水鳥を追立てよと命ず。しかるに何處を見ても小石なし。伊豆守ふと側の店に蛤を賣り居るを見て之を買取り、石の代りにして之を投げ、水鳥を追立

(一)今の宮城の內堀に架したる橋。二重橋の東北。

逸話

枚擧に遑あらず

馬場

てたり。これも一場の頓智なり。されど之を以て智慧伊豆の智慧を證明すべきには非ざるなり。

或時將軍朝鮮人の曲馬を覽んとて、(一)八重洲河岸に馬場を構へさす。事急なり。土手を築かんはなし得ぬにはあらねど、忽ち築き忽ち取除くは無益なり。乃ち伊豆守の指圖にて、籠屋に命じ、數百千の竹籠を造らせ、其の上に芝を置かせて、瞬く間に晴の馬場が出來たり。これも一場の頓智なり。されど之を以て智慧伊豆の智慧を證明すべきには非ざるなり。

以上の如き逸話は一々枚擧するに遑あらず。少年時代の雀取の失策は有名なる話なれば、誰も聞知り

(一)麴町區丸の內、大手外郭の南にあり。馬場

(一)德川秀忠。大事を託するに足る

たらん。(一)二代將軍が、「以て大事を託するに足る。」と感ぜられしも宜なりけり。此の一事は以て伊豆守の人となりを知るべし。己は八裂にせらるとも主君の過失を言はず。世にも賴もしき人なるかな。

智の有無は生れつきにもよれど、少年時代よりの心がけの如何にも由るなり。請ふ、伊豆守が如何にして智を得たるかを見よ。或人伊豆守に向ひて、如何にして智を得たるかを問ふ。答へて曰く、「これ我一人の力にあらず。何人の智ももと格別の差なきものなり。若し我に智ありとせば、そは此の物のお蔭なり。」とて足を見せたり。其の足の甲に、畏りだこ三つ四つあり。

正坐謹聽

(一)大河内久綱。(二)松平正綱。(一二三六―一二三〇八)

才覺

丸寢

臨終

足の甲にたこあるは、正坐謹聽に慣れたればなり。伊豆守曰く、「我が實(一)父も、養(二)父も、家康公、秀忠公に召使はれて、御才覺と御家法とをよく〳〵存じたり。我は幼少の頃より正坐して、實父、養父の教を謹聽せり。秀忠公、家光公の御側に晝夜相勤めたり。御次に丸寢して、段々承ることを考へに考へたり。かくて足にはたこが出來たり、心には才覺が出來たり。」と。嗚呼、伊豆守の智慧は正坐謹聽の賜なり。今の世の青年たるもの、豈伊豆守の足だこに就いて學ぶ所なかるべけんや。

伊豆守の臨終は、殊によく智慧伊豆の實を發揮せり。伊豆守病んで將に死なんとせし時、三代將軍と四

手書

鼻にかく

ゆゝし

代將軍とより賜へる親筆の書を悉く取出させ、之を新しき藥研に入れて燒かせたり。而して我が身と共に埋めよと遺言したり。何が故に伊豆守は將軍の手書を燒きけるぞや。其の中には世間に洩すべからざる秘密の事もありしならん。されど多くは伊豆守の功を褒めたるものなるべし。子孫若し之を鼻にかくることもあらば、ゆゝしき事なり。故に一切之を燒きたり。我が身の死すると共に、我と我が功を自ら沒したり。嗚呼、これ智慧伊豆が智慧に相應する功業の世に現れざる所以なり。而して又智慧伊豆の智慧伊豆たる所以なり。

—すゞりの水—

寓話

〔La Fontaine.（西暦一六二一—一六九五）

件

何食はぬ顔

一五　頓智五題

和田垣謙三

一、ラ・フォンテーヌの果物

佛蘭西の寓話作者ラ・フォンテーヌ[一]は、毎朝食事後に果物を食べる習慣があつた。或朝のこと、後でと思つて、一個の梨を爐棚の上に載せて置いて、ちよつと書齋へ行つた。其の間に一人の友人が來訪したので、室へ通した。彼が再び其の室に來て見ると、件の梨が見えぬ。「おや、誰か梨を食べてしまつたかしら。」訪問客は何食はぬ顔で、「僕ではないよ。」「君でなくつて幸だ。實は鼠を退治しようと思つて、あの梨に亞砒酸を入れ

て置いたのだ。」友人驚いて、「そりや大變だ。解毒劑は無いか。」「安心し給へ。今のは梨どろばうを見出す爲の僕の計略だつたよ。」

二、辛抱と强情

因業

ものの半時間

或老人の馬車と、因業な青年の馬車とが、長い狹い山路の一角で、ぱつたり行合つた。老人の方は後戻するには七八町も行かねばならず、青年の方は僅か半町ばかりに過ぎなかつたが、青年は敢へて後戻することを肯じない。ものの半時間も睨み合つた擧句、青年は老人を凹ましくれんものと、悠然と新聞を讀始めた。老人、「新聞があいたら貸して下さい。」青年は遂に引返した。

三、冷たい慰藉

命旦夕に迫る債權者

命旦夕に迫れる病人、親切らしく訪ねて來た債權者に向ひ、「今度といふ今度こそはもうだめだ。」債權者「何をばかな。しつかりなさい。返濟の義務の完結しない中は、何でそんな事があるものですか。」

四、けしからぬ國

取れゝばこそ

或人露西亞旅行中、數頭の犬に吠えつかれた。石を拾つて投附けようとしたが、固く地面に凍りついて取れゝばこそ。天を仰いで歎じて曰く、「けしからぬ國もあるものかな。犬を放して、石を繫いで置くとは。」

五、外交的辭令

甲乙の兄弟が共に食事をした。卓上に菓子が二つあつた。甲は一つを平げて、又もや手を出しさうにした。乙「それは私の分だよ。」甲「其のお前の分を間違へて先へ食つてしまつた。御免よ。」と、甲は遠慮なく自分の分として、第二の菓子をも食つた。

―西遊スケッチ―

一六　鍛錬

河上肇

ジョン・スチュアート・ミル(一)は、生れて甫めて二歳の時から、早くも父の手許で學問を始め、三歳の頃からはギリシヤ語(二)を學び、八歳の時には、更に第二外國語

(一) John Stuart Mill. 英國の哲學者。（西暦一八〇六―一八七三）

(二) Greece.

として(一)ラテン語を學び、十三歳に達する頃には、既に經濟學をも一通りは學んでしまつて、ほゞ今日の大學を卒業した位の學問をした人である。

かく言へば、ミルは非常な天才であつたかのごとく思はれるが、決してさうでは無い。父(一)ジェームス・ミルが思ひ切つて鍛錬をした結果である。父のミルは、あの有名な英領印度史を脱稿する前には、毎朝四時に起きて、夜は十二時に寢たと傳へられて居る。此の努力主義をば、其の儘自分の子に應用したのである。かゝる父の下に教育された子供のミルは、生れてから殆ど玩具といふものを持たされたことも無く、子

(一) Latin.

天才

(一) James Mill. 英國の哲學者。（西暦一七七三―一八三六）

努力主義

供の遊戯もせず、繪本なども父からは曾てあてがつて貰つた事が無い。日曜日でも、遊び癖が附くとよくないといふので、一日でも遊ばせられなかつたといふ事である。ミルはかくの如き教育を受けた上に、獨立してからも非常な勉强をした人である。彼の平生の格言は、「人の働けなくなる夜がもう來るぞ。」といふのであつたと傳へられてゐるが、げに彼は、何時死ぬかも知れぬ、生きて居る今日の中に働いて置かねばならぬといふ考を、始終有つて居たものと思はれる。彼は三十三歳で肺病に罹り、四十八歳の時には遂に一方の肺を失つてしまつた程であつたけれども、六

永眠す

無慮

十七歳で永眠するまで、殆ど一日の休もなく働いた。そして永眠前、死の床に在つて、「余は人事を盡したり。」との一句を吾々に遺し得たのであつた。

ルミ・トーアュチス・ショジ

考へて見ると、同じ鐵でも、鍛錬すれば刀となり、更に十分に鍛錬すれば、遂に古今の名刀となる。相州物の刄の部分は所謂刄金と皮金を合はせて、無慮八百四十萬七千四十枚程の鋼鐵を折重ねて鍛錬したものだといふ。同じ鋼鐵であつても、八百四十萬枚も折重ねるほどの鍛錬をすると、人を斬ること春風を斬るが如しといふ古今の名刀

が出來上るのである。繰返して言ふが、同じ鋼鐵である、たゞ鍛へに鍛へて、之を折重ねること八百四十萬枚にして、始めて古今の名刀となる。人間も同じ事である。同じ人間であるけれども、苦心努力、折重ねること八百四十萬枚に達すれば、如何なる人もそれ〴〵の方面に於て、必ず有爲の人物となり、世に交つて折れもせず、曲りもしない豪傑になり得るのである。相州傳の鍛刀法、これを人間に譬ふれば即ち教育である。火に入れ、水に入れ、延ばしては重ね、重ねては又延ばし、遂には八百何十萬枚も折重ねる程、打つて〳〵打鍛へなければ、立派な人間は出來るものでは無い。

有爲の人物

古人も「(一)これ聖、念ふなければ狂と作り、これ狂、よく念へば聖と作る。」と言ひ、又「(二)人一たびすれば己之を百たびし、人十たびすれば己之を千たびす。」とも言つて居るが、實に偉人が天下に名を成したのは、すべて非常な苦心と努力を費し、驚くべき勉强と修養を積んだ爲である。約言すれば、何れも非常な鍛錬を經た結果である。

—社會問題管見—

約言す

(一)「惟聖罔念作狂、惟狂克念作聖。」(書經)

(二)「人一能之、己百之、人十能之、己千之。果能此道矣、雖愚必明、雖柔必强。」(中庸)

一七　我が幼時

新井白石

我が六歳の頃、上松といひし人の、少し文字などありしが、七言絶句の詩一首教へて、其の意を解き

誦をなす
文才
學匠

(一)新井與次右衛門正濟。
(二)上總國久留里城主、土屋民部少輔利直。

きかせしに、やがて誦をなしければ、三首まで教へられしを、人にも講じ聞かせたりき。「此の兒、文才あり。いかにも師を擇びて學ばしめらるべし。」など、かの人もいひしかど、頑なる昔人たちのいひしは、「昔より言傳へし事あり。『利根、氣根、黃金の三こんなくしては、學匠はなり難し。』といふなり。此の兒、利根こそ生れつきたらめ、尙幼くして、其の氣根の程もはかり難く、家富めりとも見えねば、黃金のことも心得られず。」などいひき。我が父も、(一)「戸部(二)の御いつくしみによりて、常に側を離れ參らせず。學に入れ、師に從はしめん事もかなふべからず。されど幼きより物書くことをば、戸部も人

課を立つ

人に語り誇らせ給ひしことなれば、せめて物をば書習はしめたくこそ侍れ。」とて、我が八歳の秋、戸部の上總國に往き給ひしあとにて、手習ふことを教へしめらる。

新井白石

其の冬の十二月なかば、戸部歸り參り給ひしかば、常に傍に侍ふこと故の如く、明けの年の秋、また國に往き給ひしあとにて、課を立てられて、「日の中には行草の字三千、夜に入りて一千を限りて書出すべし。」と命ぜられたり。冬に至りぬれば、日短くなりて、課はま

だ滿たざるに日暮れんとすること度々にて、西向なる竹緣のある上に机を持出でて、書終へぬることもありき。また夜に入りて手習ふに、睡の催して堪へ難きに、われに附けられし者と密かに謀りて、水二桶づつかの竹緣に汲置かせて、いたく睡の催しぬれば、衣脫棄てゝ、まづ一桶の水をかぶりて衣打着て習ふに、初は冷やかなるに目覺むる心地すれど、しばしほど經ぬれば身暖かになりて、また睡くなりぬれば、水をかぶること前の如くす。二たび水をかぶりぬる程には、おほやうは課をも滿てたりき。これ我が九歲の秋冬の間のことなり。

かたの如く

かゝりし程に、此の頃よりは、我が父の人に贈り給ふ文をば、かたの如くには書きたり。十一歲の秋、また課を立てられて庭訓往來を習はしめられ、十一月に至りて、十日の中に淨寫して參らすべしと命ぜられ、命ぜられし如くに事を終へしかば、册になして戶部に見せ參らす。賞め給ふこと大方ならず。十三の時よりは、戶部の、人と贈答し給ふ程の文ども、大方は我に命ぜられき。

又十一歲の時に、我が父の友の關といひし人の子供は太刀打の技に勝れて、人に敎ふることありしを、我にも此の技敎へられん事を望みしに、「わぬし未だ

不自然

幼し。此等の技學ばんこと尙早かり」といふ。「さこそ侍るべけれど、太刀使ふ事少しも心得ざらんには、刀、脇差、腰にせんこと誠に不用の事にや」といひしかば、「のたまふ所誠に然なり」とて、傳へて習はしめたり。かゝりし程に、其の年十六になりし者の、我と藝を試みんといひしかば、木刀を執りて三たび合ひて、三たびまで勝つことを得たりしにぞ、人々も亦興に入りて笑ひける。

―折焚く柴の記―

一八　蜻蛉

志賀直哉

暑い。今年の暑さは不自然にさへ思はれる。庭の紫陽花が木一杯豐かにつけた美しい花を、さも重さうに垂れて居る。八手は葉の指を一つ〳〵上へつぼめて、出來るだけ烈しい太陽の熱を受けまいとして居る。又八手の根本に植ゑられた鬼百合は、まさかこれほどの暑さが來ようとは思はなかつたらう。ひょろひょろと四五尺も延びて、今はそれを後悔して居る。莖は蕾の重みに堪へられず、蕾の尖つた先を陽炎の立登る乾いた地面へつけて、じつとしてゐる。それは死にかゝつた鳥のやうに見えた。

陽炎

麥藁蜻蛉が飛んで來た。蜻蛉はかん〳〵照りつけられて、苦も何も着いてゐない飛石へ來てとまつた。

そして暫くすると、其の暑さの中に滿足らしく羽根を下げた。自分は一月程前、庭先の濠で蜻蛉の幼蟲だらうと思はれる醜い蟲が、不器用に水の中に潜つて行く姿を見た。あの蟲が今殼を脱けて、かうして空中を飛んで來たのではないかと思つた。此の暑さにもめげない蜻蛉の幸福が思はれる。蜻蛉は秋までの長くもない命を、少しもあせらずに、じつとして暑さを樂しんで居る。凡そ十分もさうしてゐた。そこへ今度は鹽辛蜻蛉が飛んで來た。其の黑い影が地面を縱横に走つた。すると今までじつと羽をへの字なりにしてゐた麥藁蜻蛉が、眼ばかりといつてもいゝ頭を、くりくりと動かした。と思ふと急に輕い速さで、鹽辛蜻蛉を目がけて飛立つた。二疋の蜻蛉は追ひつ追はれつ、悠々と高く飛んで行く。其の行手にもくもくとまぶしい夏の雲が立つ。蜻蛉は淡い點々になつて、暫くは見えて居た。

—白樺の森—

めげない

一九　白馬嶽に上る

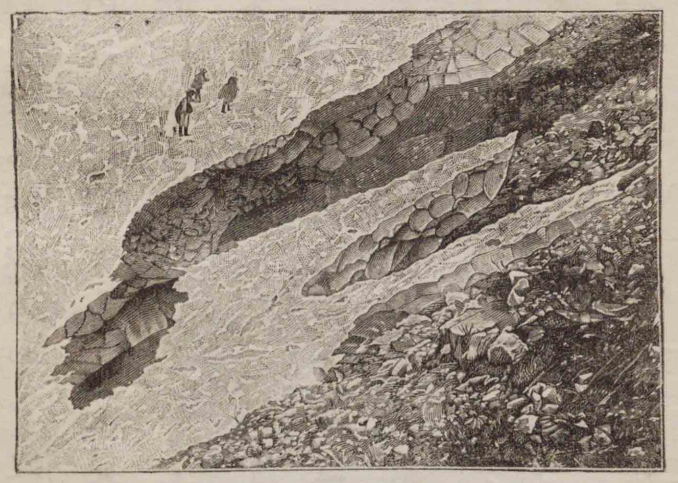
午前七時、森上(一)を發足して、白馬嶽に向つた。日本アルプス(二)の門に入らうとするのである。森上、四ッ屋(三)あたりは山間の小盆地で、海拔二千三百四十尺である。四ッ屋から白馬の頂上まで五里と稱して居る。三十

(一)信濃國北安曇郡北城村。松本より糸魚川に至る糸魚川街道に沿ふ小邑。
(二)Alps.
(三)森上より南半里。

(一)姫川の支流。北股川、南股川の二流を併せ、森上附近にて姫川と合す。

町ばかりで田が盡きて、草の原となつた。山が両方から人を壓して居る。右の方の草の中に、松(一)川が音を立てゝ居る。右手の山の傾斜面には、白樺が白い幹を見せて居る。草の中には、日光きすげの黄いろい花が、特に目立つて見える。草原が一里ばかりで盡きて、二股橋へ來た。白馬嶽より出る北股川と、白馬、鎗ヶ嶽より出る南股川とがこゝに相會して居て、橋は南股川に架つて居る。十分ばかり休息して、橋を渡り終へると、鶯が一聲啼いた。

北股川の水の音を右にして森林の中を行き、終に北股川を丸木橋で渡つて、白馬尻に着いたのは、ちやうど十二時であつた。海拔五千百八十八尺、四ッ屋から三里、小屋があつて、數十人も宿泊することが出來る。下る客、上る客、數十人落合つて、ごた〳〵して居た。こゝで午食して、午後一時十分發足して、雪溪にとりついた。これから雪溪一里、お花畑一里で、白馬の頂上に達する。日本アルプスの特色が、これから見られるのである。



白馬嶽の雪溪

仙樂

雪溪は二十度位の傾斜をして居る。氷のやうに堅くは無いが、綿のやうに柔くもない。そして、其の面がのべつに平でなくて、見渡す限り、一尺四方位づつ鱗形になつてゐて、人が上下するに都合よくなつて居る。風が水面に起す波を、こゝでは雪の面に現して居るのである。雪溪の幅は狹い處で一町、廣い處は二町もある。左右にいくつも支雪溪があつて、壯觀を添へて居る。上から吹いて來る風が、温いかと思へば、冷たくなる。冷たいかと思へば、又温くなる。休んでは登り、登つては休んだ。嶽雀が絶えず仙樂を奏する。

二時間の雪溪登は、實に面白かつた。葱びらに取りついて、お花畑が始つた。一種の野生の葱が多いので、葱びらと稱するのである。びらとは傾斜面のことである。葱びらに至つて路が平になつた。見渡す限り樹木は無い。唯偃松が這つて居る。偃松は雷鳥の巢になつて居る。

お花畑と雷鳥

霧がかゝると、雷鳥が巢から出る。をさまると、巢に引込む。かはいさうに飛べない鳥である。羽は冬は白くなるが、夏は灰色になる。それが霧の中に現

れるから、少し黑ずんで見える。烏よりは少し大きくて、丸味がある。

雷鳥の親と子お花畑かな

お花畑は天上の花園といひたい。日本アルプスの上は、空氣が澄んで居て、日光の紫線が直射するから、人の顔は黑くなるが、花は鮮かになる。美しくなる。光澤が出る。平地に移したら、鮮かさも、美しさも、光澤もなくなる。高山植物の花を見ようと思ふなら、日本アルプスに登らねばならぬ。

午後六時、白馬の頂上の小屋に投宿した。霧が深いので、絶頂に登るのは明朝に讓る。

奇拔

拳大

世にも可憐

翌朝もやはり霧が深かつた。それでも午前四時五十分に小屋を出て、五時五分に絶頂に達した。西方だけ霧が開けて居て、數十條の雪溪を帶びて居る劒嶽、立山一帶の高嶺が、如何にも雄壯な姿をして居た。白馬の頂上の東面だけは、絶壁となつて居る。他は緩な傾斜を爲して居て、奇拔でもなく、雄壯でもないが、何となく親しい山である。

午前七時、更に嶺上を南に進んで、杓子嶽を攀ぢた。拳大の小石がごろ〳〵して、木も草もない。唯駒草があるのみであつた。駒草の花は世にも可憐である。お花畑に群を爲さないで、他の多くの高山植物の草の

超然

生長し得ない石原に超然として孤生して居る。色といひ、形といひ、場所柄といひ、眞に天上の花である。

駒草や雲の上なる石の山。

――大町桂月の文による――

二〇　山の歡喜

河井醉茗　著

あらゆる山が喜んでゐる。
あらゆる山が語つてゐる。
あらゆる山が足ぶみをして、
舞ふ。躍る。
あちむく山と、
こちむく山と、
合つたり、
離れたり、
出てくる山と、
かくれる山と、
低くなつたり、
高くなつたり、
家族のやうに親しい山と、
他人のやうに疎い山と、
遠くなり、
近くなり、

歡喜

あらゆる山が、
山の日に歡喜し、
山の愛にうなづき、
今や
山のかゞやきは、
空一ぱいにひろがつてゐる。

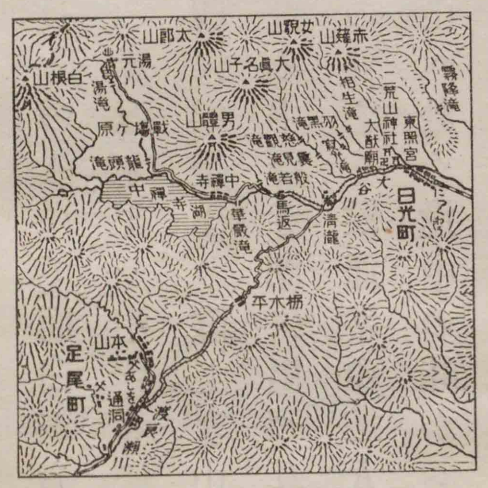
—現代詩人選集—

二一　日光だより

大町桂月

八月二日、當地に來りてより、今日は二十六日、殆ど一月に成候。凡そ日光に遊ぶものは多けれども、小生の如く日光の山水に忠實なるものは少かるべしと存候。

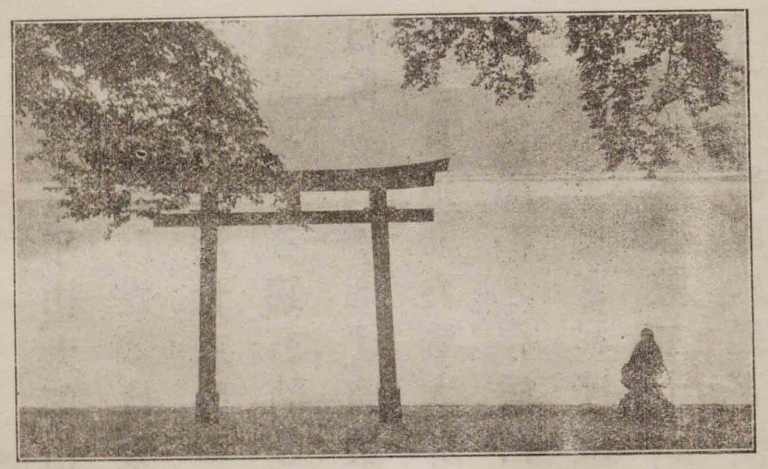
日光は瀧の名所、七十二瀑と申居れども、實際見るに足るべきものは、二三十にて候。其の中にて、華嚴が瀧の王に候。其の高さ俗に七十五丈と稱すれども、某博士の實測によれば、五十五間ある由。其の次には霧降、湯瀧、龍頭瀧。これらがまづ第一流に候。裏見になると第二流に候。裏見の次には相生瀧、次には羽黑瀧、次には慈觀瀧、次



には日月瀧、次には寂光瀧。小生が見て面白しと思ひたるは、以上の十瀑に候。赤薙山に懸れる七瀧は、唯細長きのみにて、面白からず候。

馬返しより中禪寺に上るまでの溪谷は、天下の壯觀に候。是より險しき山を攀ぢて華嚴瀧を看て、更に進み中禪寺湖に出づれば、唯々自然の美に驚嘆するの外なく候。通常の遊人は參らざれど、茲より足尾銅山へ赴く途中の峠から、後は非常に低き足尾の方の山谷を見下し、前は中禪寺湖を隔てゝ男體山を見上ぐる景色は、箱根の蘆の湖に倒富士を見る景色よりも、優つて居ると存申候。

驚嘆す
遊人



中禪寺湖

千嶽萬峰
幽邃閑雅

中禪寺湖より進んで龍頭瀧を見、戰場ヶ原を行盡して、湯瀧を見て、湯の湖に至れば温泉あり、湯本と申候。こゝは千嶽萬峰に圍まれて、幽邃閑雅此の上もなき處に候。日光より湯本まで六里、清き溪流あり、天下の大瀑あり、二つの珍しき湖水あり、高原あり、更に仰げば日光連山の高峰あり。山の態、水の姿、其の妙を極め盡して、かつ局面の變

局面

化多く、實に日光は日本第一の山水と存候。男體山、女貌山、大眞子山、太郎山、白根山など皆登りしが、最も面白しと思ひたるは、太郎山の頂の御花畑に候。中凹みて平かに、浮世の外の草花一面に連りて、神の宮殿に敷詰めたる錦を踏むも、かくやと思はれ候。周圍の丘は餘り高からず、奇巖立ち異木横たはりて、造化の畫がき且造りたる大屏風の如く、帝鄕とはこのやうな處を言ふかと存候。白根山の絶頂も面白く候。

日光を見ざれば結構を說くこと莫れとは、東照宮(一)の事に候。棟數二十三、美を盡し、巧を極め居候。神社としては綺麗に過ぎて、崇高の感は起らざれど、美術としては實に至れり盡せりといふの外なく候。あゝ大山水と大美術とを兼ねたる日光は、日本第一の樂園に候。

(一)別格官幣社。

崇高

三代將軍の大猷院は、大いに劣り申候。大猷院と東照宮との間に介せる二荒山神社(一)は、中古より鎭座せる神社に候。即ち勝道上人(二)始めて日光を開き、男體山まで上り寺を建て、又此の神社を建てたるものに候。此の僧は、弘法大師よりも前に本地垂跡の說を唱へたる人に候。男體、女貌の二大山をさして二荒山といひしを、弘法大師其の字音を取りて、日光とつけたる由に候。

(一)國幣中社。

(二)高僧。下野の人。弘仁八年(一四七七)歿。年八十一。

開山堂には勝道上人の墓あり。釋迦堂には家光に殉死したる名士の墓あり。慈眼堂(一)の側には梶定良の墓あり。定良は家光の臣なるが、家光の薨じたる後、廟畔に廬を結び、毎朝早く廟前に拜謁し、兀然として坐して動かず。此の如きこと五十年、一日も之を廢したることなかりし由、誠實なる人に候。水戸義公之を褒めて、「曾聞孝子廬親墓者、未覩臣廬君墓者。乃今於居士乎見之」と書かれ候。

明日は出發して歸途に就く積りに候へば、いづれ遠からぬ中に、お目にかゝりて詳しくお話し申すべく候。名物の日光羊羹に頰ぺた落されぬやう、豫め御用心なさるべく候。

(一) 慈眼大師天海僧正を祀る。

兀然

憤を起す

二二　學藝に志す者の訓

三浦梅園

—新體書翰—

今の人或は學に志し、或は藝に志す者、一旦憤を起し、晝夜を分たず勉め勵むといへども、已に一月を經、半月を過ぎ、怠る心早く生じ、吾がつとめ至らざるとはいはで、性質の過に歸す。馬は疾しとて朝暫く走りて止まんに、いかでか牛の終日歩まんには及ぶべき。谷間の石の磨かれ、井桁の圓くなるも、豈一朝一夕の力ならんや。今日やまず、明日やまず、今年やまず、明年やまず、而して後其の効あり。人一生の力を其の道に

奥義

用ふるさへ、尚其の奥義に至るは易からず。況や我が一月半月、乃至一年半年の勤を以て、他人一生の功に比せんとす。思はざるの甚だしきなり。昔李白書を匡山に讀む。漸く倦みて他行せし時、道に老人の石にあて、斧を磨るに逢ふ。之を問へば「針と爲すべきとて磨る。」といひけるに感じて、勉めて書を讀み、遂に其の名を成せりとぞ。小野道風は本朝名譽の能書なり。若かりし時、手を學べども進まざるに倦みて、後園に立休らひけるに、一匹の蛙の泉水のほとりの枝垂れたる柳にとび上らんとしけれども屆かざりけるが、次第次第に高く飛んで、後には遂に柳の枝に移りけり。

(一)唐の大詩人。

(二)日本三蹟の一人。醍醐朱雀村上の三朝に仕ふ。康保三年(一六二六)歿。年七十一。

道風之を看て藝の勉むるにあることを知り、學んでやまず、其の名今に高くなりぬ。

—梅園叢書—

二三　天の橋立

幸田露伴

天やゝ曇りたれど、橋立(一)一覽の念勃々として止め難ければ、小舟を儆ひて、朝早く宮津の客舍を出で、鏡の如くなる江上を、ゆら〳〵と漕行く。舟は小なれど、苫をかけ、毛氈を布きなどして、火入まで備へたれば、乘心地いとよし。濱邊に櫂を立てゝ網を干したる樣の、恰も畫の如くなる漁村を左に眺めつゝ、漸く松影の婆娑たる長洲に沿ひ、北に向ひて進む。

(一)丹後國宮津灣の西北岸より東南に突出する沙嘴。長さ二十七町餘。

勃々
客舍
ゆら〳〵と
松影婆娑

舟子の語り出づる様々の名所話に耳を傾けつゝ、漕行く程に、やがて籠(一)神社の前に着きぬ。社前に茶店あり。しばしそこに憩ひて、下駄をば藁草履にはき換へ、直ちに成相山に登る。路は嶮しけれど、苦しき程にもあらず。右に折れ、左に曲り、上り上りて、傘松の下に至り、首を回らして望めば、眼前の好風景まことに日本三景の一たるに耻ぢず。與謝の江、與謝の海を劃れる白沙青松は、恰も浮べるが如く、六里の翠色、遠く萬頃の波光に映じたる様、畫にも寫し難く、筆にも表し難し。岩瀧の村、芳野の山、九世の文殊堂は近く前にあり。黒岬の鼻は遠く左にあり。釣する海士の小舟、立

(一)國幣中社。

三景の一たるに耻ぢず

萬頃の波光に映ず

昇る賤が家の煙、いづれも詩趣ありて、面白きことい賤が家の煙詩趣

ふべからず。

さて天の橋立股眼鏡とかいひて、こゝに登りて眺望する者は皆かくして見るといへば、我もをかしさを忍びて、全景に背を向け、身を屈め、頭を垂れて股の間より覗き見れば、不思議や、今まで淡く見えし景色俄に油繪の如く、パノラマ(一)の如くなりて、水の様、山の姿、ひとしほ其の趣を添へ、水中に天あるか

(一)Panorama.

と疑へば、又天上に水あるが如く、長橋の其の間に架せる有様、まことに大空に立てる虹ともいふべく、又海中に漂へる浮島ともいふべきなり。

成相山より下りて、ひとり天橋の松の間を歩み、橋立明神の所よりまた舟に上りぬ。こゝの松樹は丈の長短不揃にて、老いたるもあれば、又さまで大きからざるもあれど、下枝は皆よく揃ひて海波に垂れたる景色、殊に面白し。切戸といふ所に智恩寺といふ小寺あり。山門も、塔も、本堂も建築皆古雅にしてゆかし。

かくて龍燈の松、涙が磯などいふ名所を横に眺めつゝ、夕暮の程にまた宮津に歸りぬ。　―枕頭山水―

古雅

二四　猿

或日M提督が自分に猿の話をして聞かせた。提督がまだ艦長で居た時、敏捷な小さいチンパンジー(一)を放飼にして、名を、ジョッコ(二)と呼んでゐた。檣に昇つたり、船の底にはいつたり、水兵が演習をすると、其の眞似をする。水兵はそれを面白がつて、皆でかはいがつて居た。ちやうど陸軍に聯隊で飼つて居る犬がゐるやうに、此の猿は、軍艦の猿になつてゐた。

然るに或日ダイヤモンド(三)を嵌めた指環が、筐に入れた儘で紛失した。一人の水兵が嫌疑者にせられた。

提督
(一) Chimpanzee.
(二) Jocco.
(三) Diamond.
嫌疑者

無造作

探索の手掛

探偵
監視

其の水兵は艦長の前に出て、無造作にかう言つた。「艦長殿、私がダイヤモンドを盗んだと思はれてゐるのでありますか。」艦長は答へた。「さうさな。とにかく猿が取つたとは誰も思つて居ないやうだ。」

此の言葉を聞いたとき、水兵の頭に或考が浮んだ。水兵は探索の手掛を得たやうに思つた。それからはちやうど探偵が嫌疑者を監視するやうに、水兵は軍艦の猿を監視し始めた。

二三日立つて、水兵は石炭庫に天鵞絨の小さい筐のあるのを見出した。それは石炭の中に埋めてあつたのである。誰がこんな事をしたのだらう。どうも猿

祈禱

らしい。

水兵は忽ち工夫して、猿の腕首を摑んで、筐のあつた所へ連れて行かうとした。ところが石炭庫に近くなればなる程、猿が震へ出した。ちやうど犬が自分の糞をした所へ連れて行かれるのを嫌ふやうに、軍艦の猿は石炭庫へ行く事を嫌つた。とう〳〵庫に來て、水兵が筐を見出した所を猿に指さして見せると、猿の黑い目に恐怖の色が現れた。そして猿は祈禱をするやうに、両手を合せた。

それから水兵は虛の筐を出して猿に見せて、指に指環を嵌めたり抜いたりする眞似をして見せた。猿

はそれを見てゐたが、暫くして意外な事をし始めた。猿は指の爪で不細工に石炭の中を搔捜し始めた。間も無く石炭の中から

藏品

藏品のダイヤモンドが出て來た。そこで水兵は艦長の前へ出た。「艦長殿、盜人が分りました。これが寶石で、これがそれを盜んだ奴であります。」

猿は此の言葉が分つたらしい様子をしてゐた。分らぬまでも、此の場で何事か訴へられ、又聽取られてゐるといふことを悟つてゐたに違ない。猿は途方に暮れた様子で、頭を低れて、視線を船の甲板の上に落してゐて、艦長の顔を一目も仰ぎ見ることが出來な

途方に暮れる

視線

かつた。

「さうか。此の役に立たずめを、どう處分してやつたものだらうかな。」と艦長が言つた。

處分

評議の結果、猿を取調べて愈有罪と極つたら、窃盜をした水兵と同じ刑罰に處するがよからうといふことになつた。航海は退屈なものだから、何か慰になるやうな事があると、誰でも其の機會を捕へようとするのである。取調は一種の軍法會議を組織して行ふことになつた。猿の辯護をする役人も出來た。そこで中世風の裁判をして、刑罰に處するか、放免にするかになるのである。

機會を捕ふ

刑を執行す

Bridge.

不便

猿はとう〳〵有罪と極つて、刑を執行されることになつた。併しそれは眞似だけにして置かうと議決された。金剛石の持主は赦免の請求をしたが、此の請求は、銃口を猿に向けた上で採用するがよからうといふことになつた。

此の銃殺の眞似を、水兵共は樂みにして待つた。

愈〻其の日の朝になつて、猿は(一)ブリッヂへ連れて行かれた。そして銃を持つて水兵等が自分の方へ向いて來るのを見て、不便な猿は途方に暮れた目をして、一人々々の顏を見た。一人の水兵が進み出て、白布で猿に目隱をして遣つた。其の時、猿の痩せた手足はぶ

かなぐり棄つ

物見高い

電光の如く閃く

るぶる震へた。猿は何か恐ろしい事が實行せられる、そして、それが自分の身の上だといふことが分つたのである。

「撃て。」といふ號令が掛ると、不便な猿の全身は電氣を掛けられたやうに震へた。此の場の危險が分つたのだらう。猿は両手を縛られてゐた繩を引きちぎつた。頭の背後で結んである目隱の布をかなぐり棄てた。そして銃を構へた水兵等、それから士官等、物見高い乘客や判事などの群を見渡した。其の目の中には恐怖と憤怒と努力の三つが電光の如くに閃いた。それから大膽に身を跳らして、一人の士官の肩の上に

〔Boat.

波と戰ふ

飛上つた。次に一人の水兵の肩に移つて、非常な速度を以て、舷に飛附いて高く叫びながら、海に飛込んだ。

「やあ、海へはいつた。猿が海へはいつた。」かう言つて、大勢が舷へ馳寄つた。水兵の中には、猿を助けに續いて海へ飛込まうとした者もある。「ボートを卸せ。」と言ふ者もあつた。此の騒はむだであつた。不便な猿は暫し水面を泳いで、波と戰つてゐたが、とう〳〵沈んで見えなくなつた。

M提督は此の話をしてしまつて言つた、「言ふまでも無く、それから先の航海は、何となく物悲しかつたのですよ。こんな事を言つたら、貴方は笑ふでせうが、猿が溺れてからは、艦内で笑聲がしなくなりました。ちやうど親類か友達の死んだ時のやうに、何物を見るにつけても、不便なジョッコーの事が思ひ出されてならなかつたのです。」

―森林太郎、諸國物語による―

二五　水泳日記

八月一日　晴　午前九時から水泳部開場式。校長先生のお話があつて、今年始めて開設になつた由來から、水泳の必要、水泳の心得等、色々とお諭しにあづかる。水泳の先生は永井先生で、生徒は總數百二十名、甲乙丙の三組に分れて、甲組長が五年級の齋藤君、乙

組長が同じく五年の白石君、丙組長が四年の西村君である。僕は乙組に編入せられた。泳ぐ間は二十分位だが、初めてのせいか、大變に疲れた。

八月二日　晴　僕は少しは泳げるのだが、甲組の人のを見ると、早くあゝ泳げればよいと羨しい。丙組にはまだちつとも泳を知らぬ者も居る。一間位しか泳げぬ者もある。今日は先生から教はつて扳手をやつて見たが、まだ旨く出來ぬ。午後六時から博物の井上先生がお出でになつて、動物の講話があつた。其の中に、「獸は四足で體を支へ、足を運ばせて歩き走るから、足がよく發達してゐる、即ち足の動物である。鳥は

體を空中に浮べて進行するから、翼の發達が著しくて、翼の動物と言つてもよい。魚は主として體の後部を振動かして進行するから、尾は著大である。魚は尾の動物である。」と説かれたことが、如何にも面白く思はれた。

八月三日　晴　甲組では西瓜取の競爭があつた。今日も扳手を試みたが、昨日よりはよく出來るやうになつた。沖に汽船の通るのが二艘見えた。六時頃大夕立。

八月四日　晴　乙組の競泳があつて、大分よく出來ると、先生から褒められた。

八月五日　晴　午後の講話に、水中の馬術に就いての御話があつた。馬に乘つて水を渡る時には、馬の尻の方に乘つて、手綱をしつかり持つて、馬を自由に泳がせるのであるさうな。さうして馬の首を上げさせて、泳いで行く方向を間違はせないやうにするのが、肝心であるとの事である。先生のお話に、明智左馬介(一)は湖水(二)の淺い所を渡つたのであらう。宇治川の先陣も、淺いからさうむづかしくは無かつたらうと言はれた。

肝心　(一)光春。一に光俊。光秀の從弟。　(二)琵琶湖。

八月六日　雨で水泳はお休。みんなで五目ならべをして遊んだ。

八月七日　晴　乙組で腹を下したものが三人。甲組の立泳が面白かつた。

八月八日　晴　抜手が次第に上手になつて、面白くてたまらない。長時間泳いでも、餘り疲れないやうになつた。

八月九日　晴　水泳中、先生が脇に來られて、大分上手になつたから、來年は甲組にはいれるだらうとおつしやつた。

八月十日　晴　閉場式があつて、一同煎餅をいただいた。僕は樂しい十日間を夢のやうに過して、短過ぎるやうに思つた。しばらくの間に、皮膚の色は眞黑

になつた。日方も餘程殖えたに違ない。

二六　漢土雜話

韓伯瑜といふ人、父を喪ひて母と二人して住めり。母は至りて嚴しき人にて、伯瑜に少しの過あれば、杖もてむちうつを常とす。伯瑜痛さを忍びて、少しも怨める色なし。或日母例の如くむちうつに、伯瑜泣くこと頻りなり。母怪しみて其の故を問へば、「是までむちうたるゝ毎に痛かりしかど、今日の痛からぬは、母の年老いて力衰へ給へる故なりと思ひ、心弱くなりて泣くなり。」といへり。

延陵の季子といふ人、或時其の君の使にて他國へ行く途にて、徐の君を訪へり。徐の君つら〳〵季子の劒を見て、口にこそ言出でざれ、欲しと思ふ色面に顯れたり。季子心には察しながら、君命を奉じて使する途なればと思ひて與へず。使の事終りて、歸路に立寄りて見れば、徐の君既に死したり。季子大いに悲しみ、彼の劒を其の墓の傍の樹に結び附けて歸りぬ。從者怪しみて、「徐の君既に死せり。墓にかけて誰に與へ給ふぞ。」といへば、「我曩に心の中にて與へんと思ひ定めたれば、其の人死したりとも、初の志を變ふべきにあらず。」といへり。

自得す

一國の相

あさまし

群羊猛虎を擊つ

晏嬰といふ人、齊の國の相となれり。其の御者馬に鞭うちて自得せる色あり。御者の妻之を見て夫にいふやう、「晏子は身の長六尺にも滿たず、一國の相として、其の名天下に隱れなけれども、思慮深ければ、出入にも人に下る樣子あり。良人は身の長八尺、御者となりて誇らしき色あるはあさましからずや。」夫大いに恥ぢて、是より大いに愼みしかば、嬰は其の志を賞して、次第に高官に任用したりといふ。

文天祥が勤王の師を擧げし時、友ありて止めていへるは、「今敵兵三道より內地に迫る。君が小兵を以て之に赴かんとするは、群羊の猛虎を擊つに似たらずや。」と。天祥答へて、「國家今日の急に天下の兵を召すに、一人一騎の赴くもの無きこそ口惜しけれ。我が力の足らざるを知らざるにあらず。身を以て國事に盡し、天下の忠臣義士をして、風を聞いて起たしめんとするのみ。」と。聞く者感動せざるは無かりき。軍敗れて擒となるに及び、敵、天祥に問ひて曰く、「君既に宗社の保つべからざるを知りながら、なほ力を盡せしは如何に。」と。天祥曰く、「父母病あらば、恢復の望なくとも、誰か一日も藥を廢せんや。救はれざりしは天命のみ。」と。遂に刑せられて死せり。

風を聞いて起つ

宗社

二七　春夏秋冬

(一)

空も霞みて　遠山の
櫻花さく　永き日に、
囀る鳥の　聲聞けば、
春の喜　果もなし。
柳の　綠　榮の花の
文織る野邊に　旅寢して、
曇りも果てず　照りもせぬ
月を見るこそ　嬉しけれ。

(二)

文織る野邊

風情

子規鳴く　森かげに、
卯の花白く　咲出づる
夏の朝の　眺こそ、
春にもまして　風情あれ。
晝の暑さを　行水に、
流して庭の　ゆふ涼、
いさゝ小川の　水の面を、
螢飛ぶこそ　嬉しけれ。

いさゝ小川

(三)

いつか夏去り　秋來ぬと、
目にはさやかに　見えねども、

(一)「秋來ぬと目にはさやかに見えねども、風の音にぞ驚かれぬる。」（古今集、藤原敏行）

風の音にも　靜けさの、
籠りて秋は　物寂し。
萩(一)のうねりに　散る露を、
命とたのみ　鳴く蟲の
聲も更行く　夜半の窓、
書を讀むこそ　嬉しけれ。

(一)「白露をこぼさぬ萩のうねりかな。」(芭蕉)

(四)

林まばらに　葉は落ちて、
寒げに見ゆる　鳥の宿、
裏の大川　水あせて、
橋の脚いと　高きかな。

水あす

雪降積る　家の外、
圍爐裏にそだを　さしくべて、
親はらからの　永き夜を
語り合ふこそ　嬉しけれ。

そだ
はらから

二八　月雪花

大宮人

春はハナミ、夏はスゞミ、秋はツキミ、冬はユキミ。夏のミだけが、月雪花三つの眺に關係は無いが、夏の月夜の涼は又格別に快い。春の花見は昔の大宮人にも、今の丁稚小僧にも、一年間の最大歡樂である。芋、栗を捧げて秋の月を祭る風俗は、同じく一般國民的の雅

雅興

興である。「お月様いくつ」の俚歌、「雪よふれふれ」の童謠、月雪花の風流は子供の時から教へられて、我等の頭にしみこんで居るのである。

風流

月雪花を見て感ずるのは、歴史的懷舊の念が添ふからである。我が國の櫻花は、唐人も高麗人も美しいといふに違ないが、彼等の感ずる所と我が國民の感ずる所には大きな徑庭がある。米國人は觀月といふことに關しては、殆ど何の興味をもつて居らぬ。我等は子供の時から月雪花で教育せられた。月雪花を弄ぶといふ詩的教育を受けて來たのである。

歴史的懷舊

徑庭

詩的教育

風流の眞義は塵世を忘れることである。全く塵世を忘れて活動社會を離れることは隱遁者の所行であるが、少くとも皎々たる明月、皚々たる白雪、雲の如く霞の如き花に對して、これを眺めて居る間は、如何なる人も利慾に營々たる實社會を忘れるのである。月雪花の効用は美術とおなじく、人を高尚にし、人を温雅にするのである。

塵世

隱遁

皎々皚々

利慾に營々たり

我等日本人は月雪花を大いに觀賞して、之を人事と結合した。高尚な人格は之を月雪花に譬へる。「月に叢雲、花に風」。月の入るのや、雪の消えるのや、花の散るのは、之を人の蹉跌や死去に譬へる。さうして繁榮、隆昌、幸福は月雪花の美に比較した。古來の吟咏はすべ

叢雲

蹉跌

吟咏

譬喩
有情化
有徳化
光風霽月
赤心
邪佞
なぞらふ
氷潔
嚴肅
聯想
節義

て此の譬喩法を用ひて居る。

我等は月雪花を尊敬し、月雪花に種々の美徳を附加する。無情の物を有情化した上、更に之を有徳化するのである。月は公平無私、寸毫も汚のないものとして、光風霽月などと熟語せられて、君子人の赤心に比べられる。月を蔽ふ雲は其の光明を掩ふものとして、小人邪佞の徒になぞらへられる。又雪は氷潔一點の塵の無い事から、冷たい嚴肅な所を見て、潔白な精神や節操の動かないことを聯想する。花は爛漫たる美しさの、忽ち風に散行くのを惜しんで、節義の士が身命を拋つのに譬へる。月や、雪や、花やに靈があつて、此

(一)姓は塙。武藏の人。群書類從の編者。文政四年(一八二一)歿。年七十六。

(二)紫宸殿のこと。

等の徳を備へて居るやうに感ずるのである。古人がかく感じ來つた其のまゝを我等は承繼いで、我等もさう感ずるのである。

月雪花を觀賞し得る吾等は幸福である。盲人の學者保己一(一)の逸事として傳はつて居る話に、或時月明に對して、

花ならば探りても見ん今日の月

といつた。又京都に上つた時、御所の南殿(せんでん)(二)の櫻の花盛と聞いて、

目に見ねばせめてなでんの櫻かな

と戯れた。東海道で富士の山下を過ぎる時には、

民族
傳說
品性
國民性
髣髴
肉眼
心眼

言の葉の及ばぬ身には目に見ぬも
なかく　よしや雪のふじのね

といつた。

月雪花の眺を恣にする事の出來ない民族は不幸である。月雪花があつても、之に附加せられた傳說の無い國民も亦人生の興味は尠い。我等は月雪花に對して、古來の文學を味はひ、國家を憶ひ、品性を養ひ、國民性を知ることが出來る。月雪花を通じて、我が國民の歷史は髣髴として眼前に浮ぶのである。保己一は肉眼を以ての月雪花は見なかつたが、心眼を以ての月雪花は眺め得たのである。

風致
山容水態
藝術
題材
貧弱

二九　鳥の美

飯島魁

風致といふものは、單に山の形、水の姿、それに美しい色彩の美を與へて居る植物ばかりで組成せられて居るのでは無い。山容水態如何に麗しく、綠樹彩花如何に美しくとも、其の間に動く何物かが無ければ、風景は生きた趣を生ぜぬ。

昔から花鳥といふ。文學、繪畫、彫刻、音樂等あらゆる藝術には、花と鳥とが重要な題材とせられて居る。殊に吾が邦の繪畫や、詩歌には、花と鳥とが主要な地位を占め、其の中から花鳥を除き去つたなら、非常に貧

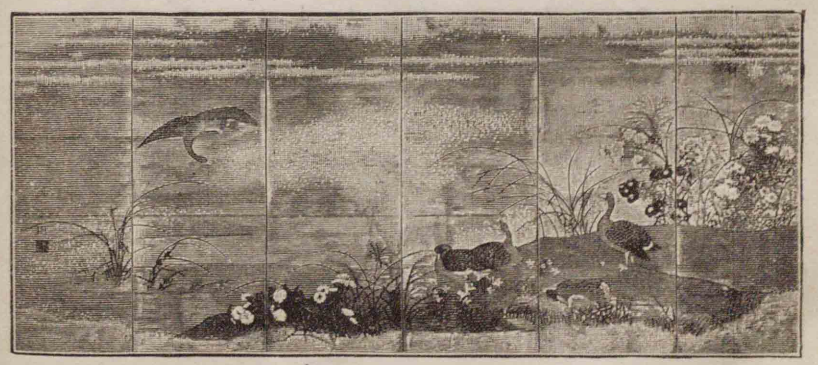
弱なものと成つてしまふ。

(一)わが宿の池の藤波
　　咲きにけり山時鳥
　　いつか來鳴かん

(一)古今集の歌。讀人しらず。

といふ通り、花だけ、鳥だけでは單調である。花に鳥をあしらひ、鳥に花を結びつけて、始めて複雜な美が成立する。「梅に鶯」、「卯の花に時鳥」、「蘆の花に雁」といふ風に、四季それぞれの花には鳥が附屬物となつて居る。

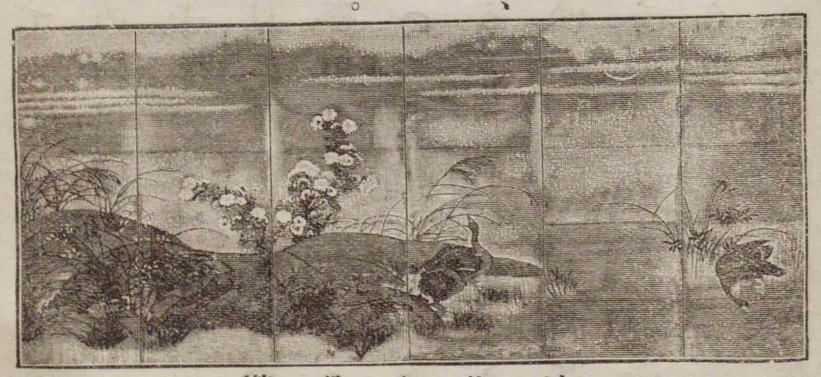
單調
あしらふ



蘆　雁

獨り鳥のみならず、あらゆる動物は、皆かく風致に美を加へて居る。禽獸蟲魚は昔からの畫題であり、詩材である。(一)春日野から鹿を奪ひ、(二)武藏野から蟲を除いたならば、其の春の旦、秋の夕の景色は、どれだけ無味なものと成るであらう。それ程に美觀上の價値のあるものを、人間が勝手氣儘に捕殺する權利をもつて居るであらうか。分り易くいへば、狩獵稅を出しさへ

(一)奈良春日山の麓。
(二)武藏國の大平原。



(土佐光信筆)

すれば、それで勝手に鳥獸を殺してもよいであらうか。吾々が擅に鳥獸の命を絶つ其の結果は、一年や二年では現れて來まいが、五年の後、十年の後は如何。更に二十年、三十年の後には、吾々の見た美しい鳥も、珍しい獸も皆姿を隱して、吾々の子孫はそれを見ることが出來なくなりはすまいか。「鶯の笠に縫ふてふ梅の花」とある鶯はどんな鳥であらうといふやうなことに成るかも知れぬ。かうなればゆゝしい一大問題である。吾々は吾々の見た鳥や獸を、やはり子孫に遺して、子孫にも樂しませてやりたく思ふ。

(一)「鶯の笠に縫ふてふ梅の花、折りてかざさん老かくるやと。」（古今集、東三條左大臣）

ゆゝしい

誇大の言

これは誇大の言では無い、日本の鳥類は今將に全滅せんとしつゝある。去年と今年とを比べて、其の間の差異を發見することは困難である。併し今と十年前、二十年前と比べても、其の間に非常な差異のあることを何人も感知するであらう。過去の變化を以て將來を推せば、十年後、二十年後にどういふ現象を呈するであらうか、今から豫め想像するに難くない。廣い世界の目から觀れば、滅亡した動物は無數である。狹い日本だけで觀察しても、既に滅亡して歷史的になつたものが、いくらもあるのである。

過去を以て將來を推す

現象

歷史的になる

諸君は美しい桃花鳥色の色彩を知つて居るであらう。併し今は桃花鳥色こそあれ、其の色に此の名を

貧はせた朱鷺（とき）といふ鳥は居ない。桃花鳥色とは、其の色が朱鷺の羽色に似て居るから附けられた名であるが、此の鳥は最早全滅して、其の姿を見ることが出來ない。蘆田鶴の千代呼ばふといはれた江戸の千代田城は勿論、江戸附近には多く鶴が居たものであるのに、維新後は其の影をだに見ることが出來なくなつた。鸛（こうのとり）も昔は澤山居た。淺草の觀音へ行く子供は、皆鸛が見られるといつて喜んだものである。築地と淺草の両本願寺、それに本所の五百羅漢（一）の屋根の上には、うよ〳〵する程澤山鸛が居たが、今は早全國一般に居なくなつた。鷺の減つたことも夥しいもので、昔

（一）天恩山羅漢寺。もと本所緑町五丁目にありしが、今は他へ移れり。

は到る處の水田に水鏡を映して、思案投首の白鷺を見ることが出來たが、今日では御獵場以外に多く之を見ることは出來ない。これはほんの二三の例である。此の他あらゆる鳥類は、日本から姿を隱さうとして居るのである。まことに風致の上から觀て、ゆゝしい一大問題では無いか。

三〇　秋分

徳富蘆花

一

今日は秋分なり。

朝起き、外に出づれば、白露地に滿つ。稻穗、粟穗、薄花、

蘆花すべて露の裡にあり、蟲聲水の如く流る。

二

彼岸の中日なれば、近在の老幼男女、藤澤に鎌倉に寺詣して歸る者織るが如し。川邊に鯊を釣る者多く並べり。

午後の日悠々として、碧潮川に滿ち、行人路に滿ち、日光空に滿ち、百舌鳥の聲耳に滿ち、風なく氣淸うして、秋心に滿つ。

三

日入りぬ。無花果の葉蔭薄闇くなりて、芙蓉の花も夕と共に凋まんとす。空に雁聲あり。

十五夜の雨に隱れし月は、今宵照出でぬ。庭の眞砂何時しか霜置けるやうに白み、樹影黑く地に湧きぬ。庭の白萩月に照りて、雪の如し。

—自然と人生—

三一　一燈錢

久坂義助

此の度同社中申しあはせ、自分々々の力を盡し、骨を折りて、些細の事ながらも相儲け置きたき事に候。非常の變、不意の急にさし懸り候はんにも、囊中拂底にては差支ふるものに候。有志の人の牢獄に繫がれ、又は飢渴に迫り候ものも、おひ〳〵相助けたく、義士、節婦の碑を立て墓を築く等にも力を盡し、手を伸し

拂底

尤も

よも

たき事に候へども、同社中、有餘りの金もあるまじきことに候へば、毎月寫本なりとして、僅かの貯蓄致置きたく、月末、松下塾まで銘々持寄り致すべく候。半年にもせよ、一年にもせよ、塵も積れば山となる理にて、きつと他日の用に相立つべく考へられ候。尤も同社中、身の膏を搾り出して集むる事なれば、迂濶に費すべきにあらず。已むを得ざることあらば、同社中申しあはせの上にて、取揃へ申すべく候。抑人を救ふも、用に備ふるも、富貴長者の身ならば、なほ如何様にも相計らふべけれど、我々にては、かくまでにするは、貧者の一燈とも申すべき事に候。至誠の貫かぬ理はよも

(一)吉田松陰のこと。長州藩士にして、幕末の志士。

あるまじく候。これに依つて、此の度取立て候金を、一燈錢とは名付くるにて候。

一、毎月寫本六十枚づつ、村塾まで必ず持寄るべく候事。

一、寫本料は先師(一)の定むる所、眞字十行二十五字五文、片假名同斷四文の事。

一、一日僅かに二枚づつのことなれば、さまで勉强のならぬことはあるまじ。もし此の枚數不足の時は、代を以て相償ひ、必ず持寄りこれあるべき事。

右の條々此の度申しあはせ候。これしきの事に骨を

惜しみ候程にては、我々の至誠貫き候こともおぼつかなく候やう相考へられ候。銘々きつと怠らぬやう致したき事は申すもおろかに候。　以上。

三二　座右の銘

中根東里

一、父母をいとほしみ、兄弟に睦じくするは、身を修むる本なり。本かたければ末しげし。

一、老を敬ひ、幼をいつくしみ、有德を貴び、無能を憐む。

一、忠臣は國あることを知りて、家あることを知らず。孝子は親あることを知りて、己あることを知

有德

らず。

一、祖先の祭を愼み、子孫の教を忽にせず。

一、辭は中るべくして誠ならんことを願ひ、行は敏くして厚からんことを欲す。

一、善を見ては法とし、不善を見ては誡とす。

一、怒に難を思へば悔にいたらず。欲に義を思へば恥をとらず。

一、儉より奢に移ることは易く、奢より儉に入ることは難し。

一、樵夫は山に入り、漁夫は海に浮ぶ。人各其の業を樂しむべし。

一、人の過をいはず。我が功に誇らず。

一、病は口より入るもの多し。禍は口より出づるもの少からず。

一、施して報を願はず。受けて恩を忘れず。

一、他山の石は玉を磨くべし。憂患のことは心を磨くべし。

一、水を飲んで樂しむものあり。錦を衣て憂ふるものあり。

一、出づる月を待つべし。散る花を追ふこと勿れ。

一、忠言は耳にさからひ、良藥は口に苦し。

——東里外集——

他山の石

三三　明治天皇の御遺物を拜す　其の一

笠井信一

(一)先月十七日、宮中より地方長官一同に午餐を賜ふ旨仰せ出されましたので、定時に參内致しましたところが、十一時過權殿參拜を許されました。權殿と申すは、崩御の後、一年間皇靈を祭らせられる宮中の御室でございます。即ち私共は此の度先帝の皇靈を拜する特別の御恩典にあづかつたのでございます。そこで、私共は長い廣い御廊下に整列致しまして、宮殿奥深く權殿に詣つて、一人づつ最敬禮を致しました。

(一)大正二年一月。

權殿

靈感

蓋し其の瞬間は、何人と雖も一種の靈感に打たれない者は無かつたでございませう。其の權殿と申すは平素皇后陛下の謁見所たる桐の間を以て、之に充てさせられたのでございました。

それから更に奥殿に進みまして、御學問所を拜觀致しました。御學問所は表御座所とも申し上げ、萬機の政を御親裁遊ばされる處でございます。先帝には永くこゝに在らせられて、德教を御布きになり、大憲を御定めになり、或は國交を御修め遊ばされ、時に或は膺懲の師を起させられる等、宏謨雄圖一に此の中で御定め遊ばされたのでございます。然らばどんな

膺懲の師
宏謨雄圖

瀟洒

に御立派な御部屋かと申すに、實に意外なことで、平常私共が參内の節、休息を許される御部屋の方が、却つて遙かに御立派である。しかも餘り廣くない二間續の御部屋であつて、瀟洒たる檜の白木造ではあるが、別段これと申す御裝飾も遊ばされてない。御机も、御椅子も、實に御質素なもので、絨毯の如きは、當初敷かれたまゝのもの故、後には色も大分褪めてまゐりましたので、侍臣から御取替を屢願ひ出ましたが、御許が無くて、遂に今日に至つたのださうでございます。

御部屋は三方壁を以て廻らし、南の一方に硝子戸

があり、御机は御座所の中央に、南向に御据ゑになつてあります。此の御構造を拜觀すると同時に、夏分は嘸御暑いことでいらせられたらうと感じましたが、先帝には御暑さの御厭もなく、連日此處に出御あらせられたのでございます。之につけても、

年々に思ひやれども山水を
くみて遊ばん夏なかりけり

の御製を想ひ起して、誠に恐懼に堪へませんでした。それのみならず、此の御部屋には(一)ストーブの御設がございますけれども、(二)三十七年の冬以來、御用ひが無い。窃に承るに、其の年の冬の或朝、例の如くストーブに火が焚いてございましたが、先帝が出御遊ばすや否や、「火を消せ」と仰せられる。侍從は何故か分りませんが、唯仰の儘に火を消しました。さて其の後と申すものは、如何なる酷寒と雖も、一切ストーブの御使用を御許し遊ばされなかつたとの事でございます。これは勿論大御心の程を伺ひ奉るわけには參りませんが、侍從方の推測し奉る所では、當時皇軍が滿洲の野に大敵と戰ひ、飢寒に苦しんで居るのに御同情を垂れさせられ、兵士と艱難を共にせんとの大御心に出でさせられた次第であらうと申すことでございます。それ以來は、唯一個の小さい丸火鉢のみを御使

恐懼に堪へず

(一) Stove.

(二) 明治三十七年。

大御心

用遊ばされたとの御事。今其の御火鉢を拜觀するにつけても、思ひ出されるのは、斯民の上を思ひやらせられた御製、

桐火桶かきなでながら思ふかな
すきまおほかる賤が伏屋を

でございます。

斯民

賤が伏屋

三四　明治天皇の御遺物を拜す　其の二

此の御部屋の拜觀が終つて、更に別室の拜觀を許されました。此の御部屋には、先帝の御學問所で御使用になつた御遺物全部、其の儘に据置かれてございます。是は今上天皇陛下の大御心に出でさせられた趣に拜承致しました。構造も、方向も、廣さも、御學問所と全く同一であつて、すべての御遺物も、昨年七月十三日、即ち先帝最後の出御當時の儘に、御備附になつてございました。床の間には其の當時の御軸物が掛けてあり、其の前方には、御劔數振横たはり、御机は中央に南面してございます。先帝御在世の折は、我等如き者が御机に接近するなどは思ひも寄らぬことでございますが、今回は特に御許を蒙つて、仔細に拜觀する光榮を得ました。

まづ御机は羅紗を鏡張にしたテーブル(一)で、中程に

拜承す

仔細に

(一) Table.

焼痕がございます。これは先帝が御煙草を召上つていらせられた節、臣下より政務を言上致しましたところ、先帝には御吸ひかけの御煙草をテーブルの上の或物に横たへて、御熱心に御聽取あらせられた折、煙草が墜ちて、此の焼痕がついたのだと申すことでございます。さて此の焼痕のあるテーブルの羅紗を御取りかへ申し上げんがため、侍臣より幾度か願ひいでましたけれども、斷じて御許が無かつたとの御事。蓋し何物でもそれにて事足る以上は、修理さへ御控へ遊ばされる御儉德の至と拜察したてまつります。

儉德の至

禿ぶ

(一)Ink.

慙愧に堪へず

御硯箱は、明治二十年に鹿兒島縣から御取寄せになつた竹製の品でございます。其の中の筆は普通の御品で、我等臣下の日常用ひる物と變らないのみならず、毛尖は禿び、軸の文字は見えないほどに御使ひふるしに成り、墨も亦同樣で、一寸位に磨りへらされた品もございました。鋏も同じく普通市場にある品で、其の傍に、學校生徒等の用ひる普通のインキがございました。最初は、侍從の方が何かの調べに用ひたとて、其處に置忘れたのであらうと存じましたが、やはり先帝の日常御用ひになつたものだと承つて、今更ながら御儉德の高きに感激し、自ら顧て慙愧に堪へ

なかつた次第でございます。

御椅子の下に獅子の毛皮が敷いてございます。これは赤坂假皇居においで遊ばされた頃から、長く御使用になつた物で、毛も次第に磨りきれ、皮も遂に破れるやうになりました。そこで御取換を願ひ出でましたが、「なに、よろしい。」とて、御許が無い。せめて御修理をと願ひ出て、漸く御許を得た。併し適當の皮が無いことを言上致しましたところ、何の皮でもよろしいとの思召であつたので、赤犬の皮で補足したと申すことで、侍從が「此の邊が犬の皮です。」と說明して居られました。

(一) White Shirt.
(二) Board.

裁可

名を署す

隨時

其の傍にホワイト・シャツを入れる白いボール箱やうの物が澤山積重ねてございましたから、何に遊ばすものかと侍從に尋ねましたところ、やはりシャツの空箱であるが、書類を入れるに便利であるとて、御手許に留置かせられたのであるとの事でございました。

大臣方より上奏御裁可を願ふ書類は、紙袋に入れ、表に主務者の名を署して上るのださうですが、御親裁の後は、別の紙袋に入れて御下げになる。そして御不用になつた前の紙袋は、一枚たりとも御棄て遊ばされず、隨時御詠出の御製を御認めになる御詠草に

用ひるに其の途を以てす

反故

費目

御用ひになりました。それを御側の方が別紙に拜寫して、御歌所に御廻し申したのでございます。實に天下の物は用ひるに其の途を以てすれば、一つとして無用の物は無い。先帝はかく萬機の政を聞し召されながら、一枚の反故をも棄てさせられず、廢物を御利用遊ばされたのでございました。

また傳へ承るに、先帝が皇室費豫算を御親裁遊ばされる節は、詳細に御覽になり、祖宗の祭祀及び慈善に關する費目の外は、務めて御節約相成り、聊かにても冗費をば御省き遊ばしたと申すことでございます。

一天萬乘の君

一天萬乘の大君におはしましながら、禿びた御筆を御用ひになり、破れた敷皮を御下げにならぬといふのは、いかなる思召でいらせられませうか。皆是、節すべきを節して、有用の事にのみ御用ひ遊ばさうといふ大御心に外ならぬ事と存じます。

さて御次の間には、造花や、彫刻や、種々な御品が備へてございました。これを拜見いたしまするに、學校や展覽會等に行幸の節、御奬勵のため御持歸り、又は御買上にならせられたもので、御裝飾の御目的とは考へられません。それ故に、造花の如きも格別のものでなく、何年前のものか色も褪めはてゝ、殆ど裝飾の

趣を異にす

用を爲さぬものまで、其のまゝになつてございます。其の他、美術工藝品の御買上も、みな御奬勵のためで、俗人の道樂とは全く趣を異にしていらせられます。

御心づくし

隆々として興る

御製に、

千よろづの民と偕にも樂しむに
ます樂みはあらじとぞ思ふ

とございますが、實に此のやうな御樂みを求めさせられんが爲、先帝には長い年月の間、大いなる御苦心を遊ばされたのでございます。

今や我が國運は、先帝の長き御心づくしの御蔭を以て、隆々として興り、我等は世界の一等國民となりました。顧れば我等は長い間、聖天子御一人に、非常な御苦勞をお掛け申し上げましたのでございます。こに御遺物拜觀の光榮を拜謝するに當り、更に

公人

應分の貢獻

國民の力のかぎり盡すこそ
わが日の本のかためなりけれ

の御製をも同時に服膺して、公人としても、私人としても、力のあらん限りを盡し、以て「我が日の本のかためのため、應分の貢獻をなし、御高恩の萬分の一に對へ奉らんことを誓ふ次第でございます。

―巖手學事彙報―

坐ろに

(一)明治元年九月二十日京都御發輦、十月十三日江戸御着輦。

稜威

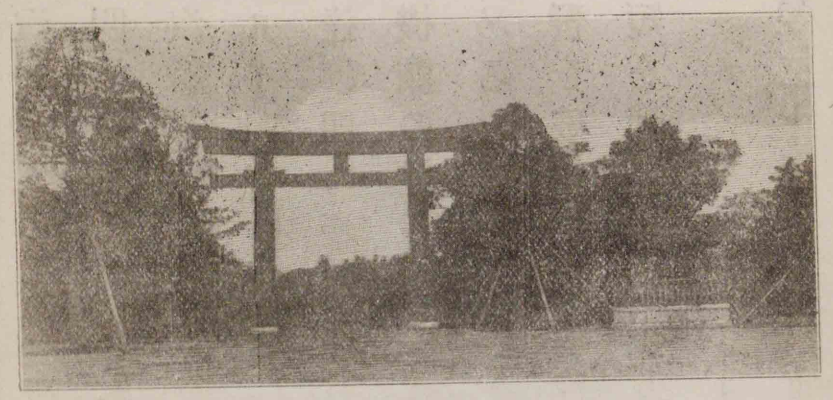
三五　明治神宮に詣でて

御紋章打つた大鳥居をくゞつて、砂利白い參道を進んで行く。道を挾む神木は全國各地からの獻上で、樹々の深い緑の色にも、國民が崇敬の心ばえは認められる。樓門を入つて神前に額づけば、坐ろに明治の大御世が心の中に浮んで來る。

鳳輦しづ〳〵と京都の御所をお立ちになり、東海道を江戸へお下りになつたのは明治元年の秋であつた。やがて江戸を東京と改稱して、こゝに大日本帝國の首都は定まつたのである。それからの四十餘年の大御世、御稜威の光は日一日と我が國の面目を改

齒牙に掛く

振興せしむ



明治神宮正門

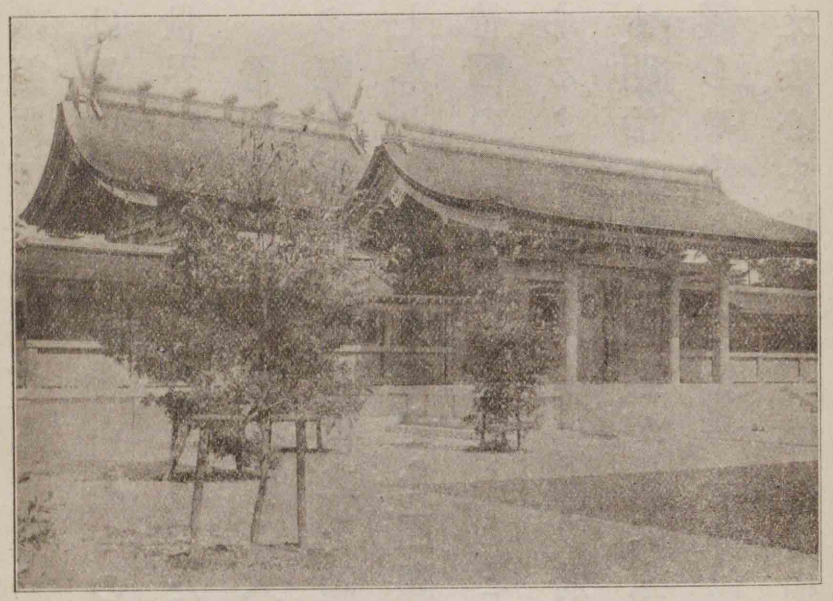
め、地位を高めて行つた。曩には列强から齒牙にも掛けられなかつた帝國が、後には世界の一等國と認められるやうになつたのは、實に此の天皇の御治績ではないか。明治五年には學制を發布して普通教育を振興せしめ給ひ、六年には徵兵の制を定め給うたので、家に不學の子なく、全國皆兵といふ今日の有樣になつたのである。數隻の小

陋習

汽船があつたばかり、一哩の鐵道も無かつた日本は、明治の御治世に於て、世界各國への航路を有する大汽船會社を有することゝなり、鐵道は內地だけでも八千四百哩以上になつた。かゝる交通運輸機關の發達は、即ち產業の增進、貿易の膨脹を語るもので、通信機關の進步も亦著しい。これは廣く知識を世界に求めるといふ趣旨から、西洋の學術を輸入し、舊來の陋習を破つて、百般の事業を改善し、他の長を採り、我が短を補ふといふ努力が、絕えず行はれた結果である。

かくて明治二十二年には帝國憲法の發布があり、翌二十三年には帝國議會の開會があつて、我が國は

立憲國敎の大本



明治神宮本殿

東洋唯一の立憲君主國となつた。敎育勅語を以て國敎の大本をお示しになつたのも此の年であつた。明治二十七八年、同三十七八年両度の戰役で、世界各國は確實に我が國民の敎育、文化の程度を知り得たので、我が國に對する尊敬は

霄壤の差

千古不磨
萬世不易

照鑒

次第に加つたのである。明治の初年と末年との比較は、眞に霄壤の差といふものであらう。外國人が之を世界史上の不思議と言つたのも無理はない。

帝國憲法は千古不磨の大典、教育勅語も萬世不易の經典、將來の國民は之を讀む毎に、明治天皇を追想し奉り、明治の大御世を回顧するであらう。さうして帝國の首都東京を想ふとともに、東京に明治神宮のあることを思ふであらう。將來國家に何事があつても、明治天皇の御靈が常に東京に照鑒あつて、帝國を護らせ給ふことを考へれば、そこに非常な强みを覺え、安心を感ずるであらう。橿原神宮に參り、平安神宮に詣でる時よりも、更に大きい、强い別種な感想を起すに相違ない。こんな事を考へながら、本の參道を靑山通へ出た。

自修文

一　人の運

大町桂月(一)

運は傍觀する人を去つて、奮鬪する人に來る。世には碁を打ちて負くれば腹が立つとて、自らは碁を打たずに、唯見物して樂しむ者あり。岡目八目「その手は惡し、あそこはあゝ打つべし。」などと、口ばかりは上手なれど、力量一向になし。これにては十年傍觀しても、二十年傍觀しても、碁に上達すべくもあらず。碁の如き遊戲はそれにても可なれども、人生にも往々傍觀的態度を取るもの多し。實行の如何を考へずにたゞ大言壯語し、人の爲したる事を非難し、高慢なる事、生意氣なる事を言ひて以て自ら衒ひ、知つた風をいひて以て自ら高しとするやうなる連中には、運は向いて來らざるべし。失敗は成功の基なり。好運を得んと思ふ者は、自ら人生の渦中に投じて奮鬪せざるべからず。

(一)名は芳衛。高知縣の人。文學士。文章家。嘗て雜誌學生及び中學世界の主筆であつた。

岡目八目　自分でその事に關係なしにそばで見て居る者にはそのよしあしが明らかに知れること。

人生　世の中の事。

傍觀的態度　實際行はずにそばで見て居る身の有樣。

大言壯語す　おほげさで勢のよいことをいふ。

非難す　わるくいふ。

衒ふ　ほこり示す。じまんする。

自ら高しとす　自分で自分を偉いとする。

人生の渦中　人が皆一心に働いて居るそのいそがしい世の中。

高見の見物は不可なり。彌次馬となりてわい〳〵騒ぐとも、何の得る所あらんや。

(一)勝海舟壯時西洋式の兵術を學びけるが、一書肆の店頭を過ぎしに、舶載の兵書あり。當時得難き良書なり。其の價を問へば、「五十両なり。」と云ふ。海舟之を購はんと欲すれども、家貧にして直ちに五十金を辨ずること能はず、十數日間苦心慘憺の結果漸く之を調へ、書肆に行きて購はんとすれば、既に他人に購はれし後なり。海舟遺憾に堪へず。其の人を問へば、「(二)四谷大番町に住する某與力なり。」といふ。乃ち其の家に到り、情を陳じて讓與せられたしと乞ひしに、與力聽かず。借覽を乞ひしに亦聽かず。海舟曰く、「晝間は足下に必要あらん。されど夜間寢に就くの後は、我に貸しても可ならずや。」と。與力止むを得ずして曰く、「四つ時を過ぐれば貸しても可なり。されど戸外に持出すことを許さず。」と。海舟茲に一縷の光明を得たり。翌夜より其の家に赴く。當時海舟は本所の錦糸堀に住めり。四谷大番町を距ること二里もあり。然るに海舟は風雨と雖も休まず、又一夕も其の刻を誤らず。かくの如きこと半歳餘、終に八卷の兵書

高見の見物　其の事に關係のない位置から眺めること。

彌次馬　人の後についてわけも無くさわぎまはるもの。

(一)名は安芳、舊幕臣。明治三十二年歿。年七十七。

舶載　外國から船に乗せて積んで持つて來ること。舶來。

辨ずる　つくる。とゝのへる。

苦心慘憺　いろ〳〵心配すること。

(二)今の東京市四谷區。

與力　德川幕府時代幕府直屬の級吏士。奉行下の配下に立ちて行政司法の雜務に當る。

四つ時　今の午後十時頃。

一縷　一すぢ。一縷の光明云々とはわづかながら前途に望の見えること。

謄寫　うつすこと。

(一)大町桂月著。全一卷。東京至誠堂發行。

(二)小說家。本名は長谷川辰之助。二葉亭四迷は其の號。口語體の創始者。小說の明治四十二年歿。年四十六。

單調　變化のない調子。

大鋸　おほがともよむ。

を悉く手書することを得たり。與力に向つて其の厚意を謝し、且寫本を出して、二三不審の點を擧げてこれを質す。與力感歎して曰く、僕謄寫の勞なくして、未だ通讀するに至らず。實に慚愧に堪へず。請ふ、此の書を足下に呈せん。」と。海舟固辭すれども聽かず、終に之を受けたり。與力は運を傍觀せるなり、海舟は奮鬪して運を拾へるなり。

——(一)人の運——

二　犬ころ

(二)二葉亭四迷

嬉しいにつけ、悲しいにつけ、憶ひ出すのはボチの事だ。春雨のしと〳〵と降る薄ら寒い或夜のことであつた。私は例の通り宵の口から寢てしまつたが、ふと目をさますと、耳元近くに妙な音がする。ごうといふかとすればすうと、或は高く、或は低く、單調ながら拍子を取つて、さながら大鋸で大丸太を挽割るやうな音だ。私は夜中にめつたに目を覺したことが無いから、初はびつくりしたが、能く研究して見ると、なに父の鼾なので、やつと安心して、其の儘再び眠らうとしたが、どうもこれが耳に附いて寢附かれない。仕方がないか

囃子　鳴物で調子をとること。
合の手　歌と歌との間にひく音曲。
氣壓さる　いきほひにおされる。

けたたましく　とんきやうに。
めいる　しづみ込む。

ら、聞えるまゝに其の音に聽入つてゐると、何時からとなく囃子の手が込んで來て、合の手に、遠くでかすかにきやん〳〵といふやうな音が聞える。鼾が凄じい時には、それに氣壓れて聞えぬが、鼾が低くなると、はつきりと手に取るやうに聞える。不思議に思つて益耳を澄してゐると、次第に大きく高くなつて、遂には鼾と離れ〴〵に、確かに門前に聞える。

かうなつて見ると、疑もなく小狗の啼聲だ。時々喉でも締められるやうにけたたましく、きやん〳〵と啼立てる。其の聲尻がやがて段々に細く悲しげになつて、めいるやうに遠い〳〵處へ消えて行く。——かとすれば、忽ち又近くで、堪へきれぬやうに啼出して、くん〳〵と鼻を鳴すやうな時もあり、ぎやおと欠伸をするやうな時もある。

私はそつと夜着の中から首を出して、小さい狗の聲だねえ。どうしたんでせう。」と、うるさく母に聞くと、母は優しく、「何處かの人が棄てた狗だらう。」と、一一説明してくれて、「もう晩いから默つてお寢。」と、あちらを向いてしまつた。

私も亦夜着をかぶつた。狗は門前を去つたのか、啼聲が稍遠くなるにつれ

お腹もくちくなる　滿腹になる。

て、父の鼾が又うるさく耳に附く。寢られぬ儘に、私は夜着の中で棄狗の有樣を繰返し繰返し考へた。まづ何處かの飼犬が、緣の下で兒を生んだとする。ちつぽけなむく〳〵したのが重り合つて、首を擡げて乳房を探してゐる所へ、親犬が餘所から歸つて來て、其の側へどさりと横になり、片端から抱へ込んで舐めると、小さいから、舌の先でたわいもなくころ〳〵と轉がされる。轉がされては大騒して起返り、又よち〳〵と這つて、ぽつちりと黑い鼻面で、お腹を探り廻り、漸く思ふ柔な乳首を探り當て、あわてゝ吸附いて、小さな両手で揉立て〳〵吸出すと、甘い温な乳汁が出て來て、喉へ流れ込み、胸を下つて、何ともいへずおいしい。と、腋のしたから、まだ乳首にあり附かぬ兄弟が、鼻づらで割込んで來る。取られまいとして產毛の生えた腕を突張り、大騒をやつてみるが、とう〳〵取られてしまひ、又そこらを尋ねて他の乳首に吸附く。其のうちにお腹もくちくなり、親の肌で身體も温つて、とろけさうな好い心持になり、ついうと〳〵となると、含んだ乳首が脫けさうになる。夢心地にもあわてゝ又吸附いて、一しきり吸立てるが、ぢきに又たわいなくうと〳〵となつ

て、乳首が遂に口を脱ける。脱けるも知らずに口を開いて、小さな舌を出したなりで、一向正體が無い。其の時忽ち暗闇から大きな腕がぬつと出て、正體なく寐入つてゐる所をむづと掴み、宙に吊す。驚いて目をぱつちりあけ、いたいけな聲で悲鳴を揚げながら、四足を張つてもがく中に、頭から何かで包まれたやうで眞暗になる。窮屈で息が塞がりさうだから、出ようとするが出られない。暫くもがいて居る中に、ふと足掻が自由になると、領元を撮まれて、高い高い處からどさりと落された。うろ〳〵としてそこらを視まはすけれど、何だか變な淋しい眞暗な處で、誰も居ない。ぼんやりとしてゐると、雨に打れて、見る間に濡れしよぼたれ、おそろしく寒くなる。身慄一つして、くん〳〵と親を呼んで見るが、何處からも出ては來ない。途方にくれて、よち〳〵と這出し、夜中に唯ひとり、温な親の乳房を慕つて悲しげに啼廻る聲が、さつき一度門前へ來て、又何處へかさまよつて行つたやうだつたが、それが何時か又戻つて來て、何處をどうもぐり込んだのか、今は啼聲が正しく玄關先に聞える。

私はたまらなくなつて、母に賴んで、此の小狗に食物を與へて、一晩泊めて

いたいけ　幼くかはいさう。
足掻　手足の運動。
濡れしよぼたる　びしよぬれになる。
途方にくれる　どうしようかと方法にまよふ。

やることにした。犬嫌の父は、泊めた其の夜を啼きあかされると、うんざりしてしまつて、あくる日は是非逐出すといひ出したから、私は小狗を抱いて逃げまはつて、どうしても放さなかつた。父は困つた顔をしてゐたが、併しこれも一時のことで其の中に小狗も獨寢に慣れて、夜も啼かなくなる。逐出す筈のものに何時しかポチといふ名まで附いて、姿が見えぬと、父までが一緒に捜すやうになつてしまつた。

——二葉亭全集——

うんざりする　よわり切る。
(一)全四卷。東京朝日新聞社發行。
(二)上野公園下。東京市北部の入口。
(三)東北本線の終點驛。下り列車帝都たる東京へ向つて行くを上りといひ、東京から地方へ行くのを下りといふ。
(四)宮城縣の首都仙臺市。
(五)茨城縣の首都水戸市。
(六)常陸・磐城を通過する線。
(七)武藏國北葛飾郡。利根川の西岸。
(八)利根川の異名。
(九)下野國上都賀郡。日光町は大谷川に臨み東照宮あるのを以て名高い。

三　東京から青森まで

東京の上野停車場から、青森行の下り列車に乘りました。仙臺までは水戸を通つて行く常磐線の方が、海の眺もあつて面白からうとも思ひましたが、やはり東北本線の方を選びました。汽車の出發しようとする時、ちやうど頭の上の空を、一臺の飛行機が東の方へかけつて行きました。一時間ばかりの後栗橋の鐵橋を渡つて、音に聞いた坂東太郎を越えました。間も無く宇都宮に着きました。こゝは栃木縣廳のある所で、西の方に日光の山が見えます。日光

(一)下野國那須郡中央の廣野。東西五里乃至七里、南北凡そ十里。

(二)那須野で狩をする勇士が、背におうて居なら矢のなくしら工合を直して居る手の上に、霞が飛び居る勇ましつて有様をよんだ。籠手は弓を射る時手にはめるもの。

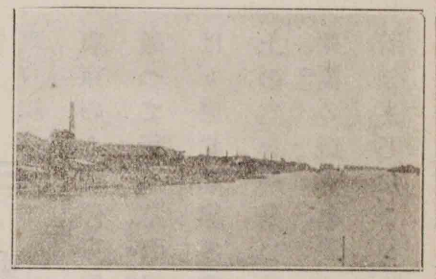
(三)鎌倉三代將軍。頼朝の二男。

(四)那須湯本の北にある毒石。

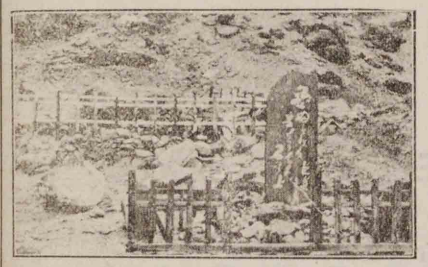
(五)磐城國白河郡。昔こゝに關があつた。

(七)春霞の立つの共に都を出たが、白河の關へ來たもの。

(八)因法師の歌人。後鳥羽。



利根川



那須殺生石

へ行くのにはこゝで乘替へるのです。

宇都宮から北へ行くと、那須の平野へはいります。今は田や畠も開けましたが、昔は廣々とした野原であつたのでせう。

武夫の矢なみつくろふ籠手の上に
霞たばしる那須の篠原

といふ源實朝の歌や、殺生石の話などを思ひ出しました。

白河に着いては、

都をば霞と共に立ちしかど
秋かぜぞ吹く白河の關

といふ歌から、昔の旅行の不便であつたことを思ひ、話に傳へた能因法師の苦計もをかしく思はれました。こゝは今馬市で名高い所です。

天皇頃の人。「都をばの歌は、實は都の家に在つて詠んだものであるが、旅中の實景らしく、思はせるために世間へは旅に出た百日の間偽つて愈から首を出して額を日にさらしてゐたといふ話。

(一)岩代國。

(二)若松市を經越後國新津に至り信越線に合す。

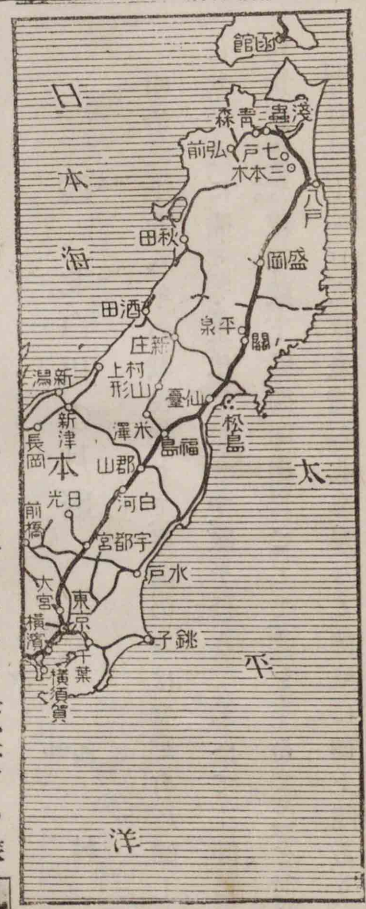
分岐点わかれば

(三)福島市から起り、米澤、山形、秋田、弘前を經て青森に至り東北本線と合す。

(四)伊達氏の舊居城。仙臺市の西。

(五)伊達家の菩提寺松島灣頭に在る。

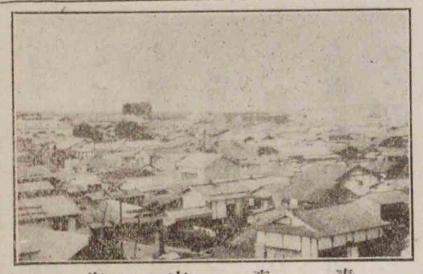
(六)陸中國西磐井郡。



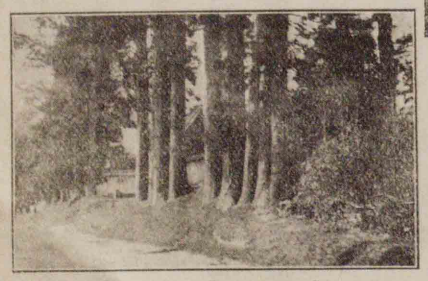
郡山は岩越線の交叉點、福島縣廳のある福島は奥羽線の分岐點です。

宮城縣廳の所在地仙臺に着いたのは、上野を出てから十時間の後でした。日本三景の一といふ松島はこゝから近いのですが、急ぎの旅ですから寄りません。歸りには見物したいと思ひます。仙臺といへば、名高い青葉城や瑞巖寺など、舊藩祖伊達政宗の事が思ひ出されました。

愈〻北へ進んで一關まで來ました。もう巖手縣です。此の近所に平泉といふ



青森市街



金色堂

所があります。昔(一)藤原氏が榮華を極めた處で、今も中尊寺といふ古い寺があると聞きました。(二)五月雨の降りのこしてや光堂。(三)といふのは、此の寺のことです。源義經は平泉の近所で討死したのです。盛岡は縣廳の所在地です。

青森縣に入つて、牧場に名高い三本木や、七戸の附近を過ぎて、淺蟲のあたりへ出ると、始めて海岸を走つて、間もなく青森に着きました。上野を出てから僅か二十時間餘で、四百五十六哩。埼玉、栃木、福島、宮城、巖手、青森の六縣を通つたのです。

(一)藤原秀郷の後。清衡・基衡・秀衡の三代鎮守府將軍に任ぜられ、奥州第一の豪族として榮華を極めた。

(二)松尾芭蕉の句。五月雨が降つてどこも陰翳であるのに、この寺ばかり美しく見えるのは、多分がこゝだけを殘したのだらうかと、寺の美しいのを詠んだのである。

(三)金色堂といふ。中尊寺域内に在る。天仁二年藤原清衡の建立。特別保護建造物。

(四)文學博士。名は時彦。京都帝國大學講師。嘗て大阪朝日新聞の記者であつた。

(五)陸軍大將明治天皇の德化。

四　北白川の月影

西村天囚

明治二十七八年の戰役終りて、臺灣の地は我が有に歸したれども、兇賊なほ其の地に據りて王化に服せず、險を恃みて敢へて王師に抗せんとせり。北白川宮能久親王殿下近衛師團長として、兵を率ゐて之を討伐し給ふ。

五月三十一日、宮は臺灣の北海岸なる澳底に御上陸あり。此のあたりは人里遠き磯邊にて、立休らひ給ふべき軒端も無く、やう〳〵沙の上に幕を張り、

毛布一枚とてもあらざれば、唯怪しげなる椅子一脚を進らせて御座所とす。折ふし樺山大將參られ、此の御有樣を見て、「あなかしこ。こゝは皇族の始めて御足を新領土に印し給ひし處なれば、後の世までも傳ふべし。」とて、木を削りて筆太に、近衛師團長陸軍中將大勳位能久親王殿下幕營之地。と記してぞ建てられける。

此の夜雨降り、蚊さへ多くして、人々いもねられず、食物も不自由なりけるが、誰とも知らず、畑の甘藷を掘取りて來りければ、そを泥のまゝ沙に埋め、その上に火を焚きて、蒸燒にして宮に進らせしに、宮には御手づから泥を掃ひ、皮を剝きてめされけり。

明くれば六月一日、基隆さしてぞ進ませたまふ。御晝食は柳割籠なる御辨當にて、副食物はたゞ梅干二箇のみなりしが、「けふは殊の外うまかりき。」と御沙汰あり。此の夜より全軍皆道明寺糒を用ふ。道險にして、糧食運搬の便無ければなり。いかにもして、宮へは常の食を進らせばやと人々苦心しけれども、せんかた無かりき。翌日は三貂大嶺の險を越えて、舍營に着き給ひしに、夜の

怪しげなる つまらぬ。そまつな。

(一)名は資紀。海軍大將。

あなかしこ あゝおそれ多い。

印す しるしつける。

幕營 てんとを張つて陣とすること。

いもねられず ねることも出來ない。いは寢ること。

(二)臺北の東北約八里。

柳割籠 やなぎの細い枝であんだ小さな行李形の辨當箱。

副食物 おかず。さい。

道明寺糒 もち米をむして乾かしたもの。

(三)臺灣の東北方に連亘する山嶺。基隆から

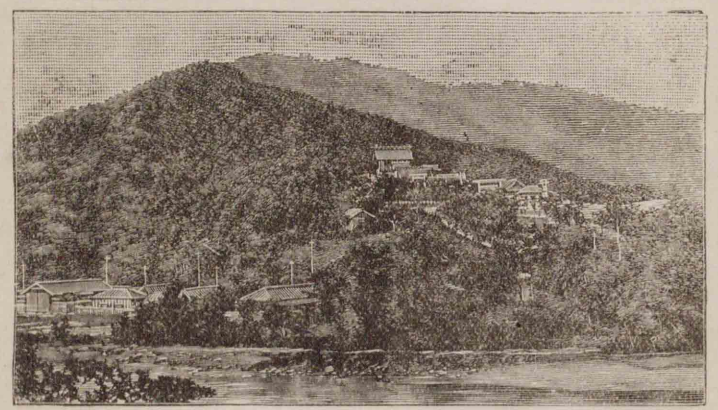
宜闌に通ずる要道に當る。
舍營　建物の營所。
(一)時の北白川宮家令恩地轍。
不慮の用　思ひがけず急に起つた入用。
飢を凌ぐ　ひもじくないだけにする。
(二)Champagne.　葡萄酒から製した酒。視盃などを擧げる時に用ひる。
寛宏の量に富む　度量の甚だひろいこと。
峻坂　けはしいさか。
お馬に云々　お馬になどはとてもお乘りになれない。
轎夫　かごをかつぐもの。かごかき。
畏くも　おそれ多くも。

九時に及べども未だ進らするを得ず。やう〳〵從者(一)恩地某が不慮の用にとて袋に入れて負來りし乾果と懷中肉汁とにて飢を凌がせられ「明日は必ず基隆を攻落して三鞭(二)の盃をこそ擧げめ。」と打戲れ給ひ、怪しげなる寢臺に鼾聲雷の如く御熟眠あらせられたり。宮の御大勇は申すまでも無く、貴き御身を以て寛宏の量に富み、忍耐の德を積ませ給へること、誠に武將の鑑とや申さん。

此の三貂大嶺といふ山は、上り二里、下り三里半もやあらん、音に聞えし峻坂にして、御馬に召さるべくもあらず。餘りの御痛はしさに轎を進らせしに、轎夫の辛勞を御覽じて、畏くも棄てゝ召されず、險路を物ともし給はで、勇ましげに拾はせ給ふ。士卒之を見て、足の勞をも打忘れつゝ、敵前に進みけり。此の日朝のほどは日照りて熱かりければ、傘を進らせしに、宮は「戰の場にありて照降傘は要なし。」とて用ひ給はず。されども餘りに熱かりければ、薄を切りて日覆とし給ふ。

山を降り給ふ頃より雨降出でしかば、傘を進らせしに、宮は「士卒皆雨にう

物ともせず　へいきで。
拾はせ給ふ　おあるきになる。
照降傘　雨にも天氣にもさすかさ。
しとど　ひどく。たいそう。
濡れそぼつ　びつしよりぬれる。
勇ましう見奉るものから　勇ましいと感心して見奉るもの。
(一)坂井重季。　え拜み云々　をがみ申すことが出來なかつた。
ことわりなり　もつともである。
掠め　どく近くを通す。
折しもあれや　その時ちようど。



臺灣神社（北白川宮を奉祀す）

たれて戰ふに、我のみいかで傘を用ひん。」とて、暴雨に沐し給ひ、御軍服もしとどに濡れそぼち給ひ、敵前近くなりぬれば、目立ちもやせんとて勳章を脱し、草鞋姿かひ〳〵しく、御脛のあたりまで泥に塗れ、青竹を杖つきてぞ進ませ給ふ。勇ましう見奉るものから、皇族の御身にてかくまで國に盡し給ふ御有樣、畏くも亦あはれなり。坂井聯隊長の御前にまゐりて、ただ「殿下。」と一言申して、後に續かん言葉も無く、涙にくれて、御顏をだにえ拜み奉らざりけるこそことわりなれ。

三貂嶺の山路にて、はや戰の始りし頃、左手の方より擊出す賊の銃丸は雨の如く、幾度か宮の御頭の上を掠めけり。我が兵これを退けて、宮は折しもあれや、左手の山の頂に構へし壘壁より雨霰

と射いだしゝを、しや小癪なり、たゞ一揉に揉みくづさん。と勇み立つたる猛夫ども、鬨を作りて無二無三に突貫し、瞬く間に攻めちらしつ。峠に登りて前面を見れば、水田渺茫として川は其の間を流れ、見る目はるけき山際には、人煙繁華の巷あり、これぞ基隆とは知られたる。忽ち砲聲殷々として彼方に聞ゆ。豫て定めし時刻なれば、これなん敵壘と我が艦隊との激戰ぞとは知られける。

既にして山を下り給ひしに、賊兵と覺しくて、一百ばかり此方へさして逃來るを、我が兵邀へて之を擊つ。銃丸は宮の御頭の上を過ぎ、颼として響あれども、彈道高くして、何の御怪我も無かりけり。かくて基隆も陷りければ、宮は市街の北端なる賊の本營に入らせられんとし、敗兵の狙擊もやと、まづ門内を窺はせられしに、果して銃丸ぞ飛來にける。さてこそと搜索せしに、天井又は床の下、此處の隅、彼處の蔭に、二人或は三人、都合十四人の賊兵あり。抵抗せし者どもは、皆引捕へて斬殺しつ。

かゝる危きを蹈ませられても御身に恙なかりしは、誠に天の助にや。そも

疊壁　とりでのかべ。しや小癪なり　いかにもしやくにさはる事であるの意。しやは意味をつよめる爲に呼びかける語。

無二無三　わき目もふらず。

渺茫　かぎりなく廣いさま。

見る目はるけし　見る目にはるかに見える。

殷々　さかんになるさまをいふ。

颼として　風のふくさま。

彈道　たまの通るみち。

狙擊　ねらつてうつこと。ねらひうち。

そも御威風の致すところなりけんかし。

——北白川の月影——

五　宮本武藏

今から三四百年も前、日本の國が亂れて、多くの大名が銘々得手勝手の戰爭をしてゐた戰國時代から、劍術や、槍や、馬などの名人が澤山ゐた。

上泉伊勢守、塚原卜傳、柳生但馬守。此の人々は皆劍術の大名人で、それ〴〵劍道に自分の流儀を發明した人である。

宮本武藏も其の時代に生れた劍術の大名人で、一生涯に六十遍も劍術の仕合をして、一度も負けたことがなかつた。劍術の仕合といつても、昔の劍術の仕合は、お面、お胴をつけて、竹刀でやるのではなく、素面、素籠手の儘、堅い木刀でほんたうに叩き合つたのであるから、負けた方は大抵は殺されてしまつたものである。時には木刀でなく、眞劍でやる時もあつた位で、眞劍勝負と殆ど同じであつた。こんな恐ろしい劍術の仕合を六十遍もして、一度も負けたことのない宮本武藏は、なるほど鬼のやうに強かつたに違ない。

(一) 北白川の御傳記。明治二十八年成る。

(二) 德川初世の劍客。二刀流劍法の祖。二天と號す。名は政名。寛永中佐々木巖流を討つ。正保二年（二三〇五）歿。年六十四。

得手勝手　かつてきまま。

(三) 名は秀綱。新陰流の祖。永祿頃の人。

(四) 名は高幹。上泉伊勢守の門に學ぶ。自ら無手勝流の祖と稱した。

(五) 名は宗矩。新陰流の名家。德川幕府に仕へ劍法の師範として重んぜられた。

素面素籠手　面もつけず籠手もつけないこと。

劍客　劍術をする人。

武者修業　武術を練る爲に諸國を遊歷すること。

高札　町中に高く建てた札。たかふだともいふ。

其の上、此の人は二刀流といふ劍術を發明した。今までの劍客は、刀一本で仕合をしたのであるが、武藏は左右に一刀づつ持つて仕合をした。武藏は「どうせ命の遣取をする時には、持てるだけ刀を持つて、振廻す方が得だ。」といつてゐたさうである。

武藏が始めて劍術の仕合をしたのは、僅か十三の時であつた。其の時武藏は、播磨の國の伯父の家にゐたのであるが、ちやうど其の土地へ有馬喜兵衛といふ武者修業の男が來て、人通の多い往來に、

「劍術仕合望む者は、何時にても相手になるべし　有馬喜兵衛。」

といふ高札を立てた。所が、武藏は手習の先生からの歸途にこれを見つけて、いかにも高慢な遣方だと思つたのであらう、持つてゐた筆で此の高札にめちやくちやに墨を塗つてしまつた。これを知つた喜兵衛は火のやうに怒つて、武藏の泊つてゐる伯父の家へ怒鳴り込んで來た。武藏の伯父は驚いて、「ホンの子供の惡戯ですから、どうぞ勘辨して下さい。」と手を突いて詫びたが、相手はどうしても聽かない。すると奥から出て來た武藏は、「伯父さん。何もそんなに詫びることはありません。わたしが此のお侍と劍術の仕合をすればいいのでせう。」と平氣な顏で言つた。有馬喜兵衛は益〻怒つて、「よし、それでは明日の朝、間違なく海邊へ來い。一刀に斬殺してやる。」と約束して歸つた。

付入つて　先方の手元へ進み入る。

(一)德川初世の劍客。燕返の劍法を發明した。

其の翌日、武藏は伯父や伯母が「逃げろ〳〵。」と勸めるのも聽かず、一人で約束の場所へ出掛けて行つた。近所近邊は大變な評判である。「かはいさうに、武藏はあの侍に殺されてしまふのだ。」と、皆武藏を氣の毒に思つてゐた。ところが愈〻仕合となると、武藏は刀も持たないで、太い薪の棒を持つて向つたが、喜兵衛が打下す太刀を横に拂ふと、忽ち付入つて、たつた一打で相手を叩き殺してしまつたといふ。

其の時、武藏は僅かに十三であつたが、骨太く丈高く、十六七に見えたさうである。此の仕合を手初に、一人で十二三人を斬散したこともあり、佐々木巖流(一)といふ名高い劍術の名人を倒したこともあり、色々な手柄をあらはした。

昔の豪傑などといふ者には、たゞ劍術が上手であつたり、力が强いのみで、外に取得のない人が多いのであるが、宮本武藏は書も名人で、其の上彫刻ま

取得　とりどころ。長所。

でが上手であつた。おまけに學問があつて、「五輪書」といふ本を書いた。此の本には、戰爭や劍術の奧義をくはしく書いてある。武藏が自分で作つて守つてゐた格言の中の一箇條に、「神佛を尊んで賴まず。」といふのがある。神や佛は、えらい方だから尊びはするが、神や佛のお蔭で得をしようと思ふのは卑しいといふ立派な考である。或時、武藏が十人もの相手と斬合をする約束をして、其の場所へ行く道で、或八幡の社の前を通りかゝつた。武藏はいつもの通り、丁寧にお辭儀をして通り過ぎようとしたが、さすがの武藏も其の日の仕合が心配であつたと見え、ふら〳〵と八幡樣を賴む氣になつて、つい神前の鈴の紐に手をかけたが、其の時はつと平生自分が守つてゐる「神佛を尊んで賴ます。」といふ格言を思ひ出したので、逃げるやうに神前を去つて、仕合の場所へ急いだといふことである。「神や佛に「お金が出來るやうに。」とか「長生が出來るやうに。」とか賴むのは、物事の分らぬ者のすることで、教育ある青年は宮本武藏と同じやうに、神佛は尊んでも賴まずに、自分の事は自分の力でやらなければならぬのである。

——菊池寛の文による——

(一)菊池寛。讃岐高松の人。

(一)陸軍大將乃木希典伯が學習院長であつた時、學生に向つて爲した講話の一節である。

(二)Massachusetts. 米國東海岸の一州。首府をボストンといふ。

(三)Harris. 瓊玉の微瑕 立派な玉にて小さいきず。

虛榮 うはべの見えをはること。

(四)Hopkins. 篤實 しんせつでまめやかであること。

沈着 おちついて居て、みだりにさわがないこと。

六　少年の美德(一)

亞米利加(二)マッサチューセット州の或片田舍に、一つの中學があつた。其の一級に凡そ三十人程の學生のある中に、(三)ハリスといふのは、歳は僅かに十四歳であるが、級中に於てのみでなく、學生の全部五百人以上の中で、第一の才子と稱せられ、校長から特別の賞牌を授けられた。然るに瓊玉の微瑕ともいふべき一つの缺點に、ハリスは其の性格が少しく眞面目を缺き、虛榮に憧れる癖があつた。

こゝに彼の同級生にホプキンス(四)と呼ぶ同年輩の俊才があつた。其の學才は遙かにハリスに劣り、怜悧といふよりも篤實、利發といふよりも沈重であつた。而も此の青年には、生れつき一種の貴い性質があつて、僞善や虛僞を惡み、名よりも實を愛し、沈默して、自分の正しいと思ふ所を最後まで實行した。

ホプキンスは又非常な勉强家で、其の學才の劣る所を勉强で補ひ、ハリスが一時間で勉强し終るものは、此のホプキンスは二時間で終つた。而も教室

へ出ては、成績は餘りに優劣なく、只僅かの點數の違が、此の二人の席次を上下して居つたから、自然互に競爭の狀態となつた。併し此の競爭はハリスにとつてのみの事で、ホプキンスには競爭などといふ考は毛頭なく、只眞面目に終始變らず勉强して、自分の正しいと思ふ所を蹈んで行つた。かうなるとハリスの性格として、ホプキンスが自分よりも多く聲望を博するのではないかと、非常に心配した結果、力めてホプキンスの缺點を人々に吹聽するやうになつた。或休の日、ハリスは數多の同級生と共に、學校の附近で野球をして遊んで居ると、遙か向ふからホプキンスが一匹の乳牛を牽いて來るのを見た。これは牛を共同牧場へ牽いて行くのであつた。ハリスは折こそ來れと內心に喜びながら、他の同級生を煽動して、ホプキンスを愚弄し始めた。ハリスと他の學生等は、代る〳〵大聲を發してホプキンスを嘲弄して、「おい田舍の牛乳屋。牛乳の代價は今どれ程か。餘り高く賣つてはいけないぞ。又如何に安くつても、乳に水を混ぜてはならないぞ。」などと言つた。ホプキンスは激怒するかと思へば、更に其の事なく、唯無言で笑ひながら用事を果して、常の如く禮をして、家路へ歸らうとした。ハリスは此の日ホプキンスが田舍の百姓の外使用せぬ粗末な長靴を穿いて居るのを見付けて、後から大聲で「諸君、あの當世流行の赤革の長靴を見給へ。」と呼んだ。又其の靴が小さいと見えて、ホプキンスは甚だしく跛ひくのを見て、雷同した他の青年は輕蔑した大聲で、「あの當世流行の歩き樣を見給へ。」と言つた。

毛頭　すこしも。

聲望を博す　よい評判をとる。

煽動す　おだてる。

愚弄す　からかつてばかにする。

激怒　ひどく腹をたてる。

雷同　わけも無く人の說に同意すること。

次の日も、ホプキンスは例の通り、乳牛を共同牧場へ送り屆けたが、ハリスは定めて怒及び之に煽動されて前日ホプキンスを嘲笑した學生等は、今日は定めて怒つて居るに相違ないと思つて居たが、意外にも全く平氣で、相變らず赤の長靴に跛ひいて、汚い帽子を冠り、汚れたカラ(一)、カフス(二)の儘であつた。其の後二週間も、毎日々々同じ樣に、平氣で乳牛を共同牧場へ送り迎へして、同じ服裝で學校へ來たから、終には學生のみならず、敎師中にも、彼を嘲笑した者さへあつた。併し彼の心中には、人の嘲笑などによつて動かされぬ立派な考があつたのである。

(一) Collar.
(二) Cuffs.

話は少し變るが、此の學校の慣例では、學年の終になつて、數種の賞狀とメ(三)

(三) Medal. 賞牌。

千を以て數へる程何千といふ程

ダルを、優等生に與へる事になつて居た。其の褒美の中には、一箇の金のメダルがあつて、是は其の學年中に、全州の諸學校中で、道德上最も善行の著しい學生を出した時に、與へられるものであつた。それで此の學校の褒賞授與式の日は、慣例によつて學生の父兄は勿論、町の重立つた人々が、千を以て數へる程大勢、學校の大講堂に集るのであつた。さて其の日になつて、賞狀やメダルの順次にそれ〴〵優等學生に渡された時、最後に殘つた金のメダルは、本年は誰も之を受ける程の事をした者があつた事を聞かぬから、式もこれで終であると思つて、大勢の來賓は皆立つて歸らうとした。其の時校長は突然聲を張上げて、「本日此の名譽ある金のメダルを受ける程眞の價値ある善行をなした青年が本校から出た事は、誠に滿足の至であります。」と言つた。パリスもホブキンスも、校長の言ふ事を不思議に思つて聽いて居た。パリスは、「金のメダルを受けるやうな事をした學生があるとは聞いた事がない。何か間違ではあるまいか。若し萬一にもあるとすれば、實に妬ましい事だ。」と思つて居り、ホブキンスは、「此の學校から本年金のメダルを受ける樣な人が出たのは實に賀すべき事である。自分などは何の善行もなさぬが、誠に耻入る次第である。」と思つて居た。校長は尙言葉を續けて、「此の眞の名譽ある青年とは、第四年級の」と言つたので、ホブキンスは不思議であると思つたが、聽いて居ると、「ホブキンスである。」と言はれた。ホブキンスは驚いて、自分の耳を信ずることが出來なかつた。母親も此の席に來て居たが、やはり何かの間違であらうと思つて居た。するといつの間にか、學校の一人の敎師がホブキンスの後へ來て、肩を押へた。公衆は一齊にホブキンスを見詰めた。ホブキンスは全く譯が分らぬから、敎師に促されて、顏を赤くして立つて居た。此の時校長は言つた、「人が眞の善行を爲すことは誠に難い。又たとひ善行を爲しても、これを自負せぬ人は誠に罕である。然るに此のホブキンスは、多數の人の爲し得ぬ善行を爲しながら、決してそれを誇らぬばかりでなく、其の自ら爲した善行が善であるといふ事さへ、實際自覺せぬといふのは、實に比類の無い美しいことである。余は既に六十の歲を越したが、此の長い一生涯に、未だ曾て一度もこんな美しい行爲をした青年に遭遇した事がない。」と言つて、兩眼から熱い

自負じまん。

性來（うまれつき。）

はては（しまひには。）

涙を流して喜んだ。ホプキンスは性來實直な青年であるから、此の時までも、まだ夢に夢みる心地で氣がつかず、やはり何かの間違であらうと考へ續けて居た。校長は感極つて言葉も出ぬ程の有樣であつたが、暫くして、此の善行とは如何なる事であつたかを、公衆に向つて述べた。

此のホプキンスの家は、元來貧しい上に、父が早く死んで、二歳の時から母親の手一つで養育されたが、彼は至極眞面目な心をもつて居る青年であるばかりでなく、他人に對して同情心が篤かつた。彼の家は學校から一哩ほど隔つて居る小さな村に在つたが、或日彼が學校へ行く途中で、數人の子供が凧を揚げて居る處へ、馬に乘つて通りかゝつた人があつて、其の馬が凧の絲に懸つたので驚いて荒出した爲に、ちやうど其處を通り掛つた一人の子供を打倒してしまつた。それを見たホプキンスは一刻の猶豫もなく、直ちに其の傍に馳寄つて、其の子供を抱起して、色々と介抱し、はては自分の肩に其の子供の手を掛けさせて負ふやうにして、程遠からぬ其の子供の家へ連れて行つた。其の家には一人の年寄つた盲目の婦人が居た。是は其の子供の祖母

不如意（思ふやうにならぬ。）

弗（一弗は我が約二圓に當る。）

であつた。此の子供は幼い時に両親を喪つて、此の一人の祖母の養育を受けて育つたが、今は生計も不如意で、只一匹の乳牛を所有して居るばかり、老婦人が搾つた乳を子供が賣つて、纔かに生計を立てゝ居つた。子供は毎朝共同牧場へ連れて行つて、夕方連歸るのを常として居たが、怪我をしたのは其の朝牛を牧場へ連れて行つて、家へ歸らうとした途中の事であつた。そこでホプキンスは直ちに近所の醫者を迎へて來て、手當を受けさせてやつたので、老婦人は其の親切を非常に感謝した。併し彼は老婦人の話で、藥代を拂ふ金の用意が無い事、子供の病床に在る間は牛乳を配達する事も、牛を世話する事も出來ぬといふ事を知つたので、此の老婦人をいろ〳〵と慰めた。それで子供が病床に在る間は、自分が代つて牛乳の配達を爲よう、又牛を世話してやらうと約束した。それから藥代には、自分が其の朝靴を買ふ爲に母から貰つた五弗の金を惠まうとしたが、老婦人のいふには、それでは誠に御氣の毒ですが、此の子の爲に昨日買つた一足の粗末な赤皮の靴があるから、我慢してそれを使つて下さい。と氣の毒さうにいつた。そこで彼は直ぐ其の五弗の

金を老婦人に渡した其の靴は粗末なばかりでなく、自分の足には少し小さいけれど、それを受取つて、毎日學校へ履いて行つたから、跛ひくといつて他の學生に嘲弄された譯であつた。其の後此の子供の全快するまで二十日間といふものは、毎日毎朝雨の降る日も、風の吹く日も、一方には牛の世話をしながら、一方には牛乳の配達をしてやつたのであるが、誰も此の事實を知つて居る者はなかつた。勿論ホプキンスは母にも告げなかつたから、母親も知らなかつたのである。

春の野に妍を競ふ百花が美しいと言つても、此のホプキンスの行爲に含まれて居るうるはしさとは、到底比較にならぬ。次に彼の此の行爲を解剖すれば、第一に眞面目といふことを以て一貫して居り、次に信義があり、禮儀があり、勇氣があり、奮鬪といふことがある。殊に此の青年をして他人の嘲笑罵言を顧るの暇なからしめた至濃至温な同情があつた。若し今爰に如何にせばかくもうるはしく善行を爲すことが出來るかといふ問題が、君等の一人から起つたとすれば、私はかやうに答へる「かくの如き眞の善行は、決して無

妍を競ふ　うつくしさをあらそふ。

信義　いつはらずあざむかず、行の正しいこと。

罵言　のゝしることば。わるくち。

至濃至温　いたつてこく、いたつてあたゝか。

理に深い井戸から水を汲出すやうにしたのでは行ひ難い。唯自然に溢れ出る泉の如きものでなければならぬ。水は結果であつて、其の泉さへあれば自然に湧出する。行は結果であり、心は原因である。故に日常眞面目、信義、禮義、奮鬪、同情、勇氣等を愛する心がまづ必要で、是等が心の中に充實して居れば、事に當つて必ず溢れ出るものである。」と答へたいと思ふ。故にうるはしい行爲を爲ようと思へば、まづうるはしい心を養はねばならぬ。ホプキンスの如く、一度これは義なりと覺つた以上は、之を最後まで遂行せねばならぬ。眞に義を愛する人であるならば、何物にも勝つて、其の義を最も緊要なものと考へるに相違ない。かくの如き人ならば、必ず勇氣を得て、飽くまで事を遂行し得るに相違ない。吉田松陰(一)先生の言に、「士道莫大於義、義因勇行、勇因義長」といふ事があるが、人が完全に德義を遂行しようとするには、必ず此の義と勇との二つが相伴なはねばならぬ。

——服部他助、恩師乃木院長による——

充實　十分にそなはる。

遂行　やりとほす。

緊要　なくてならぬ大切な。

(一)幕末の志士。長州の藩士。安政六年(一八五九)刑死。年二十九。

士道云々　士たる者の行ふべき道は義といふものよりも大なるものがなく、義の勇氣がある、勇氣があつて行はれ、勇氣は義といふ事を思ふので一層盛になるとの意。

三訂

帝國讀本卷一終

通用字及び正字對照表

（茲に其の主なるもののみを擧ぐ。本書には主として通用字を用ひたり。）

通用	正	通用	正	通用	正	通用	正	通用	正
両	兩	効	效	冦	寇	挿	插	潤	閏
仭	仞	即	卽	寶	寶	擯	檳	潛	潛
侠	俠	郷	鄉	尅	剋	攅	攢	陰	陰
免	免	卿	卿	帽	帽	攜	攜	熔	鎔
兎	兔	厨	廚	并	幷	整	整	猿	猨
冒	冒	厩	廐	屏	屏	既	既	猪	豬
決	決	収	收	稟	稟	昂	昂	猫	貓
況	況	叙	敘	往	往	晋	晉	玄	玄
准	準	唇	脣	恒	恆	桿	杆	瑣	瑣
涼	涼	罠	器	慨	慨	概	概	畫	畫
減	減	噴	噴	憩	憩	欵	款	留	留
函	函	場	場	懺	懺	藏	藏	畧	略
刄	刃	塚	冢	戲	戲	氷	冰	痴	癡
剪	翦	墻	牆	拿	拏	温	溫	皷	鼓
劒	劍	寃	冤	抜	拔	濱	濱	盃	杯

通用	正	通用	正	通用	正	通用	正	通用	正
研	研	纖	纖	万	萬	厠	廁	稿	藁
稟	稟	纏	纏	並	竝	婚	婚	競	競
顆	顆	脹	脹	亡	亾	考	攷	筍	笋
頤	頤	腸	腸	叶	協	概	槪	樓	樓
窃	竊	蒲	蒲	岳	嶽	柿	柹	汙	汚
秘	祕	罰	罰	普	普	村	邨	畢	畢
笄	笄	致	致	朴	樸	狸	貍	粕	粕
節	節	蔭	蔭	稿	藁	総	總	紅	紅
篡	篡	衛	衛	棄	棄	網	網	紛	紛
籤	籤	象	象	峨	峨	冲	沖	敕	勅
京	京	鑑	鑑	島	島	妍	妍	姉	姉
坂	阪	鬱	鬱	案	案	棕	棕	棋	棋
嶋	嶋	隣	隣	按	按	無	无	棕	棕
嚙	齧	鄰	鄰	柿	柹	狸	貍	粕	粕
峯	峰	鬪	鬪	汗	汚	煙	煙	紛	紛
村	邨	鬱	鬱	筍	笋	粽	粽	紅	紅
畢	畢			競	競	櫻	櫻	紛	紛

通用	正	通用	正	通用	正	通用	正	通用	正
厠	廁	婚	婚	考	攷	概	槪	砧	碪
敕	勅	姉	姉	慙	慚	槁	藁	暗	闇
冲	沖	妍	妍	冨	富	楫	檝	狸	貍
妊	姙	忘	忘	島	島	案	按	烟	煙
庵	菴	棊	碁	無	无	紛	紛	粽	粽
埜	野	案	按	柿	柹	汗	汚	筍	笋
阪	坂	畢	畢	畢	畢	畢	畢	畢	畢
嶋	島	粕	粕	紛	紛	紛	紛	紛	紛
峯	峰	紛	紛	紛	紛	紛	紛	紛	紛
峰	峰	紛	紛	紛	紛	紛	紛	紛	紛
村	邨	紛	紛	紛	紛	紛	紛	紛	紛
畢	畢	紛	紛	紛	紛	紛	紛	紛	紛
畢	畢	紛	紛	紛	紛	紛	紛	紛	紛

同字表（いづれにてもよし）

賀	賀	隙	隙	隷	隷	醫	醫	鬱	鬱
賛	賛	間	間	鎖	鎖	鬪	鬪		
賓	賓	閒	閒	鄰	鄰				
象	象	鎖	鎖	輒	輒				
鑑	鑑	隣	隣	輒	輒				
鑑	鑑	鄰	鄰	鬪	鬪				
鬱	鬱								

羈 羇 羈 花 華 衽 袵 谿 溪 遁 遯 雁 鴈
船 船 荒 荒 訛 譌 踪 蹤 鉾 矛 雞 鷄
艫 櫓 虱 蝨 譁 嘩 躊 躇 銹 鏽 駈 驅

本來ハ異字ナレドモ同字若シクハ略字トシテ往々混用セラル、モノ。其ノ中＊標ヲ附シタル文字ニ限リ、慣用ニ從ヒテ強ヒテ區別スルニ及バズ。

＊瓦（クワン）
ワタル。「連瓦」

巨
桓ニ同ジ。

＊体（ホン）
笨ニ同ジ。アラシ、麁、粗。

＊體（タイ）
カラダ。

＊但（タン）
タヾシ、タヾ。「但馬」

＊但（シヨウ）
ツタナシ、拙劣。

＊僭（サン）
ミダリガハシ、猥。

＊僭（テツ）
身分ヲ越エテオゴル。「僭越」

＊冑（チウ）
カブト、兜。「甲冑」

冑
ヨツギ、嫡子。又子孫。「冑裔」

＊協（ケフ）
カナフ、叶。

協
オビヤカス、脅。

＊刺（シヤキ）
サス。「刺殺。刺客。名刺」

刺（ラツ）
モトル、ソムク、乖戾。「亞刺比亞」

台（タイ）
星ノ名。又敬意ヲ表スル爲ニ語ノ上ニ添フ。「台覽。台臨」

臺（タイ、ダイ）
ウテナ、ダイ。

後（コウ、ゴ）
ノチ、アト、ウシロ、シリヘ、オクル。

＊后（コウ、ゴ）
キミ。「皇后」

商（シヤウ）
アキナヒ。

商（テキ）
モト、本。

壺（コ）
ツボ。

壺（コン）
ミチ、宮中ノミチ。

＊姫（キ）
ツヽシム。

姫（シン）
ヒメ。

＊托（タク）
拓ニ同ジ。オス、ヒラク。

託
ヨル、タノム、ユダヌ、カコツク。

＊担（タン、ケツ）
ハラフ。又アグ。

擔
ニナフ、カツグ。

＊改（カイ）
鬼ヲ追フトイフ星ノ神。

改（イ）
アラタム。

＊槍（サウ）
ヤリ。

鎗
鎗ニ同ジ。鐘ノ聲ノ形容。

＊欠（ケン）
アクビ。「欠伸」

缺（ケツ）
カク。「缺席」

＊糸（ベキ）
ホソイト、細絲。

絲（シ）
イト。

＊羨（イ）
支那ノ地名。

羨（セウ）
ウラヤム。

＊虫（キ）
魚介類の總稱。又マムシ。ムシ。

蟲（チユウ）

＊詫（タ）
ワビ、ワブ。「詫狀」

詫（タイ）
詑ニ同ジ。アザムク。

＊諂（テン）
ヘツラフ。

諂（タウ）
ウタガフ、疑。

＊證（ショウ）
アカシ、シルシ。「證明」

証（セイ）
イサム、諫。

豐（レイ）
禮ノ古字。

豐（ホウ）
ユタカ。

＊迄（キツ）
マデ。

迄（セフ）
ユク、行。

＊撰（セン）
エラブ。（ヨリトル）

選（セン）
エラブ。（書物ヲ編纂ス）

郤（ゲキ）　ヒマ、隙。

卻（キャク）　シリゾク。「退卻」

鍛（タン）　キタフ。「鍛錬」

鍜（カ）　シコロ、「鍛」

宛字（左の如き字は假名を使用するをよしとす）

おぼつかなし　覺束なし
かひ（詮の意の場合）　甲斐
きつと　屹度
さすが　流石、遉
しまふ　仕舞ふ
せつかく　折角
だけ　丈
だめ　駄目
ちやうど　丁度
ちよつと　一寸、鳥渡
でたらめ　出鱈目
とう〳〵　到頭
とかく　兎角、左右
とて、とても　迚
とにかく　兎に角
なか〳〵　中々、却々
ふるまひ　振舞
はかなし　果敢なし
ほんたう　本當
むだ　無駄
むづかし　六ケし
やたら　矢鱈
やはり　矢張

附錄終

大正十一年一月十四日三訂五版發行
大正十一年一月十一日三訂五版印刷
大正十年十一月十日發印
大正十年十二月二十八日三訂四版發行
大正七年十二月十三日改訂三版發行
大正七年十二月十四日改訂發行
大正七年十二月五日訂正再版發行
大正七年十一月二日再版印刷
大正六年十一月八日三訂帝國讀本

定價	
卷一、二、三、四	各金四十五錢
卷五、六、各金四十錢	
卷七、八、各金參十七錢	
卷九、十、各金參十六錢	

大度止臨時一定價

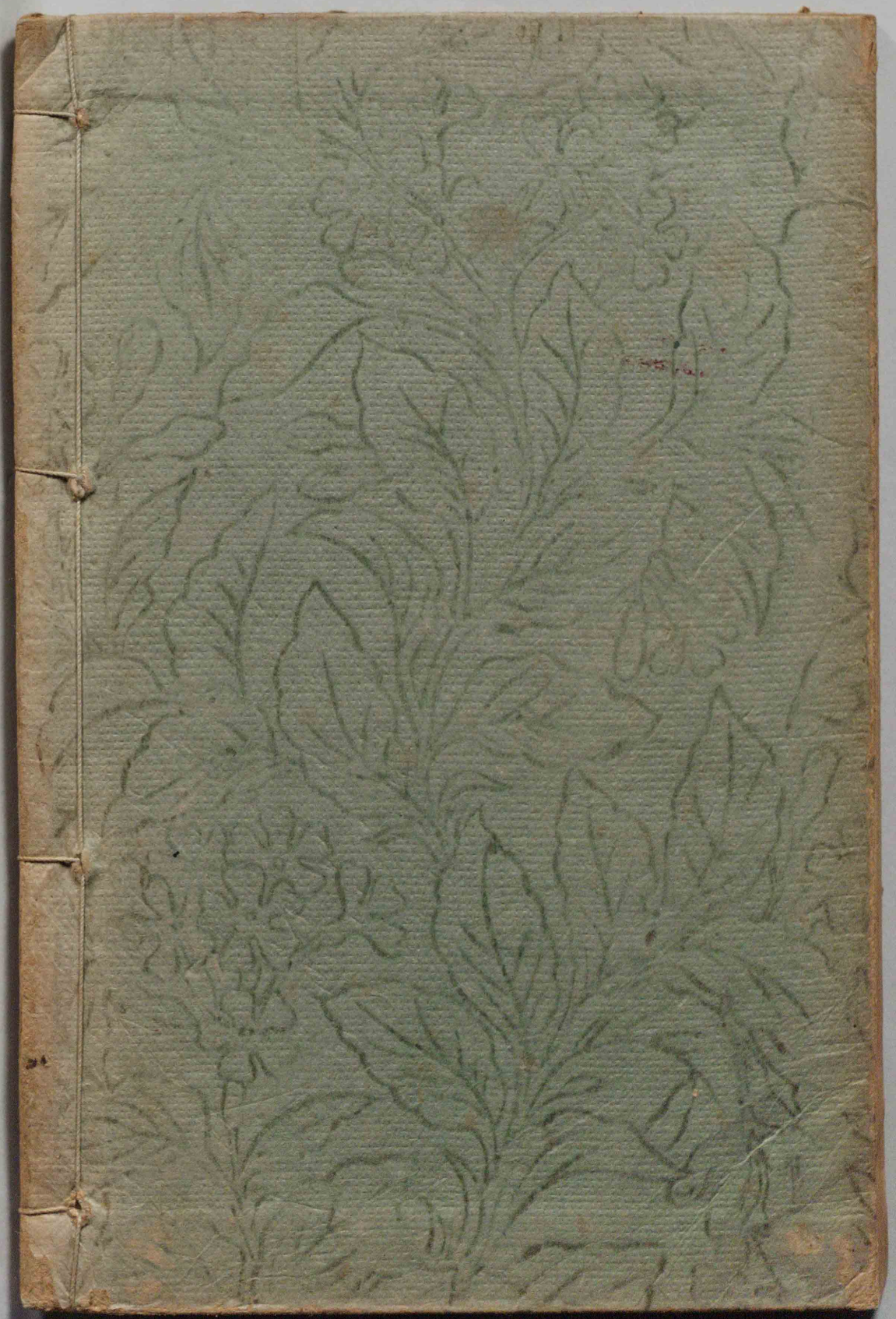
卷一、二、三、四	各金八十六錢
卷五、六、各金七十六錢	
卷七、八、各金七十錢	
卷九、十、各金六十八錢	

著者　芳賀矢一

發行兼印刷者　東京市神田區裏神保町九番地　合資會社　富山房

代表者　合資會社富山房社長　坂本嘉治馬

印刷者　東京市京橋區木挽町二丁目十三番地　合資會社　電新堂

發行所　東京市神田區裏神保町九番地　合資會社　富山房
長電話神田三〇一四・三七六〇番
振替口座東京五〇一番

著作權所有